

70
339



始



70.
339

た
め

70-339

錄 元 還

著 風 御 馬 相

京 東

行 發 堂 陽 春

大 正

5. 2. 22

內 交

緒言

■これまでかなりに永い間、自分の心の苦しみを訴へたり、叫んだり、時には何事か自信あるらしい物の言ひ方をして来た私は、此の告白を境界として沈黙と忍従とを主にした宗教的自修の生活に入るべく努力したいと思ひます。そして凡化した一個の人間として、自然に對し、世界に對して念々感謝と敬虔との生涯を送りたいと思ひます。

■私は年いまだ三十を超えること僅に四つに過ぎません。『そんな若い身空でそんな老ぼれた、治まり返つた量見を出すのはよせ』と激ましてくれる友人もありますが、現在の私にはその「まだ早い」と云ふ言葉が一番怖ろしく響くのです。私はむしろ自ら此の決心を此上なく歡ばしいものに思つて居ます。

■これまで断片的にその時々自分の姿を世間に示して来た私は、かへり見て其等の時に三角な、時に四角な、時に五角なと云つた風な歪んだ、ばらばらな自分の姿を、今は呪はくし思ひます。併しそれもやがて私の心から消え去る時が来るでせう。その時私は初めて眞に歡ばしい眞實な生活に入る事が出来るのだ楽しんで居ます。

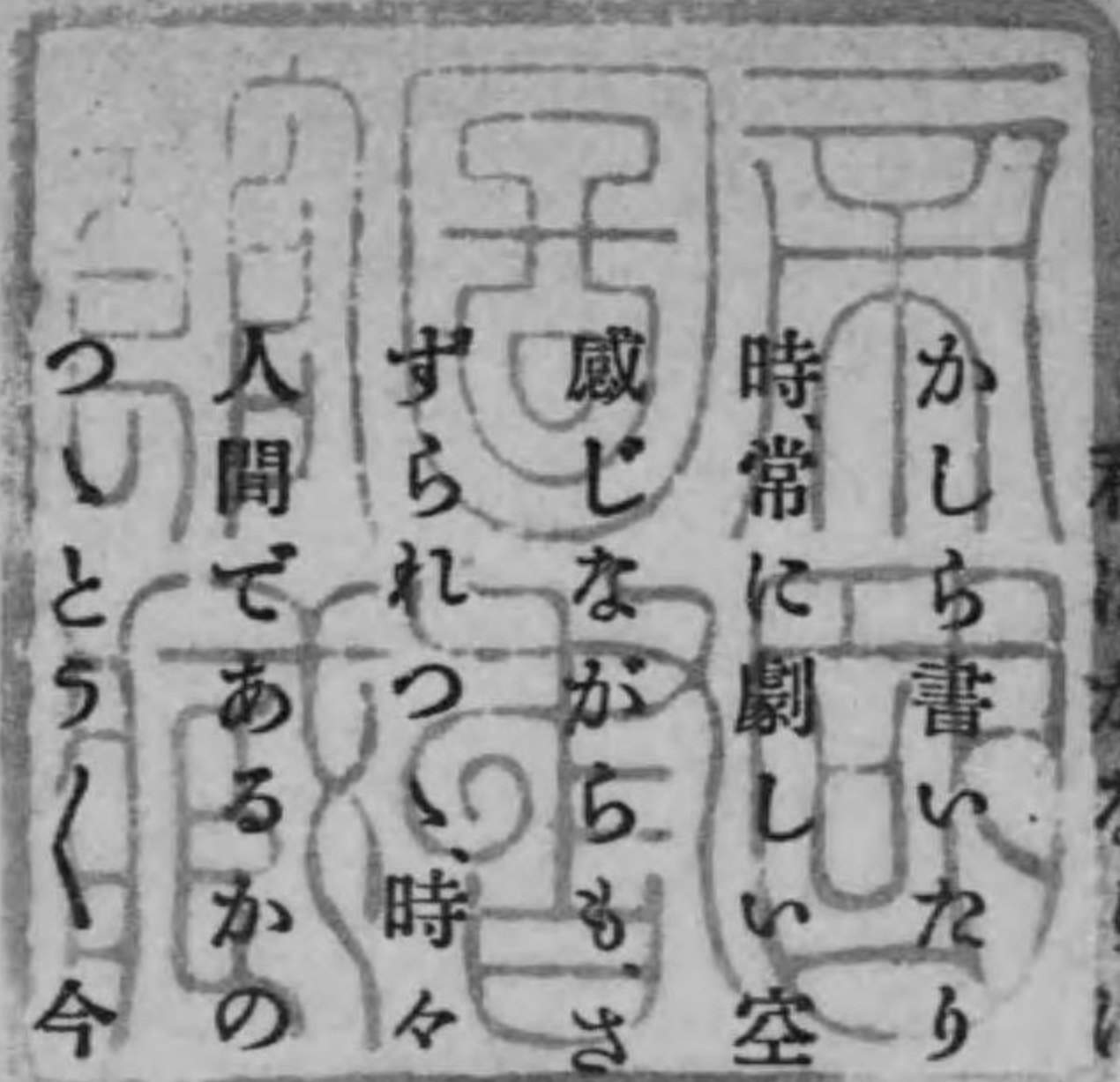
大正五年二月三日

相馬昌治



自序

私はかなり永い年月の間、一かどの思想家顔をして、何かしら書いたり云つたりして來ました。自ら真に省みる時常に劇しい空虚と不満との悲しさ苦しさ焦立たしさを感じながらもさまざまの外的誘惑や一時的の刺激に引きずられつゝ、時々は何かしら世界に貢献するところのある人間であるかの如く自らを妄想するやうな事さへ敢てしつゝとらへ今日までその苦しい生活をつゞけて來ました。而もその忌はしい自欺的生活によつて私は僅かばか



りの虚名と僅かばかりの金銭とをさへ得て來ました。

私は今日までに實にさまざまの事を怒鳴たり訴へたり説いたりしました。そしてさまざまの人々から賞められたり、けなされたり、罵られたり、嘲けられたり、持ち上げられたり、あまやかされたり、勵まされたり、からかはれたり、鞭打たれたり、撫でられたりして來ました。或時は私は文學上の主情主義主張者又は雷同者だとされました。或る時は好ましい、又は忌はしい現實主義者だとされました。或る時は人道主義者だとされました。或る時は好ましい又は忌はしい個人主義者とされました。或る時は文明批評家

だとされたり、短的に率直に自己の實感を語る人間だと云はれたり、嘘つきだと云はれたり、思想界の先驅者の一人だと云はれたり、「ヒョットコ」だと云はれたり、ジャーナリストだと云はれたり……それはくさまざまの事を云はれたり書かれたりして來ました。而も賞められるにしても、けなされるにしても、私はたゞの一度も本當に自分の正體はこれだと思ひ當るやうな言葉に接しませんでした。そして何か知ら自分の事について書いてある文章に接する度に、私は繊弱な自分の神経の焦立たしさを感ぜずには居られませんでした。而もその神経の焦立たしさが、却て私

をして更に何事かを感じさせり書かせたり云はせたりしました。けれどもかうした變挺な不自然な生活を幾年となくつゞけて來ました後に、私はどうしても其の苦しさに堪へられない時が來ました。そして

「一體こんな風にして生きて居る此の俺は何であるか、本當の俺は何ものであるか、俺はそも／＼何の爲めに何をしてゐるのか、第一俺みづからが本當に欲し求めてゐるものは何なのか……」

かう云つた風な根本的な疑問——胡摩化し胡摩化しして來た我みづからに對する根本的な疑問——が、その時から初めて私の心の奥底から湧き起つて來ました。そしてその根本的な疑問に對して、私は何一つ明確な答へを得ることが出來ませんでした。たゞ漠然と次の如きことが考へられたゞけです。

「俺みづからがこれまで辿つて來た所謂思想生活乃至所謂思想家としての生活は、どうも根本的に過つてゐるものらしい。俺は本を讀んだり考へたり、觀察したり、人と議論をしたり、自分の考へたことを書いたり云つたりする。しかし、俺は何等の信仰をも根柢に於て得て居ない。常に不安である。常に空虚を感じて居る。それにも拘

らず俺は絶えず何ものかに追ひ立てられるやうにして
同じ生活を繰り返して居る。それが一體何になるのだ。
現に自分の書いたり云つたりした事によつて、俺は他人
から自分と云ふものを誤解される焦立たしさを感じて
居るだけだし、自分みづからの一個の人間としての生活
がその爲めにますます不自然な不幸なものとなつて行
くばかりだ。それなのに俺はなぜかうした生活をその
まゝ持続しなければならぬのか。これが唯一の活計の
道である爲めなのか。それともかうして苦んで行く先
方に何等かのたしかな目當てのある事を俺は信じて居

るのか』

單に自分の活計を立て、行く爲めばかりならば、こんな苦
しい、自分の命を削ぎ取るやうな事をして居ないでも、他に
いくらか道がある。私にはどうしても或る種の人々のや
うに、これが活計の道であるとだけ考へて、それで安んじて
文學を自分の仕事として行くやうな事は出来ない。私に
は桶屋や壘屋と同じやうに文學者や宗教家や政治家や思
想家や教育家と云つた風な人達を観る事はどうしても出
來ない。それでは何等かの確乎とした信念を人生に對し
て持つて居るかと云ふに、それもまだない。強ひて何かあ

るやうに思つて、自分を胡麻化して見る事もないではないが、さう云ふ間にも私の中心は常に不安と空虚とに苦しんで居るのは明らかかな事實である。既に一個の人としての私の生活が、不完全不安定極まるものである以上、私にはとても自分をさう云つた種類の人間としてゆるす事は出来ない。こんな風に反省して見ますと、結局私には矢張自分の今までの生活が根柢に於て過つたものであると云つたやうな漠然たる感じだけが眞實なものであるとしか思はれないのでした。

茲に至つて私にはもう眞になすべきことが唯一つしか

なかつた。それはこれまでの自分の生活を根本から改造する事でした。今迄やつて來た事を一先づ止めてしまふことでした。そしてそれによつて正しい道に進み入ることでした。私はこれまでかなり永い間所謂思想家として送つて來た私自身の生活を全然造り變るより外に、今のところ自分を此の苦しみから救つてくれる途のないことを思ふやうになりました。今迄自分の主なる仕事として來た評論などを書く事を全然止めてしまひ、これまで保つて來たやうな一般世間又は他の人々との關係を全然改め、これまで交つて來た自分の周圍の人々との交際を全然改め、

これまで好加減に集めて来た知識などから全然別れ去つて、單なる一個の平凡人となつて生活の第一歩から踏み直す——その事より他に私の差し迫つてなさねばならぬ事はない、かう私は思ひ込むに至つたのです。

私の内部にかうした變化の最も鮮やかに起りはじめたのは、一昨年〇の秋からだ〇と記憶します。而してその私の心の變化は昨年〇の春に至つていよいよ激しく私を動かすやうになり、つひに私は昨年〇の四月一家を纏めて越後の郷里へ引込むに至りました。此の功利的見地から考へて甚だつまらない私の企ては、しかし私及び私一家のものに精神

的安靜を與へる上に少なからざる効果がありました。たゞさまぐの外的事情及び私自身の不徹底から、これまで従事して来た仕事やその仕事を媒介とした東京に於ける多くの人々との關係を曖昧にして置いたところから、心の中心を郷里に置きながらも、私自身は昨一年の半ば以上を東京で暮さねばならなかつたのは、自分ながら不覺の至りでした。體の置きどころもさうであつたと同時に、私の心も矢張そんな風な曖昧な點が甚だ多かつたやうに思はれます。その事の何よりの證據は、昨年の暮近く出版した『我等如何に生くべきか』と題する私の評論集です。あれは主

として私の内部に前に述べたやうな變化の起り初めた以後の私の感想表白を集めたものですが、その中には何と云ふ不純な分子の多い事とせう。自分では主として自分みづからの躓いた思想生活の過誤を懺悔して、單なる一個の平凡人としての生活に入る事より外に自分の行くべき道がないと云ふ事だけを云ひさへすれば好いのだと思ひながらも、矢張それを賣物として世間へ出すと云つた風な半無意識の卑しい、さもししい心持から、或は思想界の覺醒を促すやうな口吻を洩らしたり、或は社會生活の改良を主張するやうな口吻を洩らしたりして、あまりに幼稚な自分の考

を胡摩化さうくと努めて居た跡がありくと見えます。何と云ふくだらない男とせう。

けれども時が來ました。キツパリと云へる時が來ました。此の一卷はそれを云ふ爲めに、前からちよいと書きつけて置いたノートによつて昨年の暮近くから書いたものであります。私がこれを書かうと思ひ立ちましたから、既に一年餘も経過して居りますが、それを書くことによつて失はねばならぬものに對する私の未練から、つひ今日までその思ひを果し得ずに來ました。たゞに自分のその思ひを果たし得なかつたばかりでなく、その間にも私は依然

として自分の眞に云ひたい事を胡麻化して來ました。

一四

けれども今度こそ本當に其の時が來ました。今こそ誰の力もかりずに、私は過去の所謂思想家面をさげて居た私みづからを葬ることが出來ます。私は矢張り歴史に縋つて生きて行く凡俗として最もふさはしい人間です。強ひて新らしい人生の眞理を攫まうとしたり、他人に物を教へたり、世界に何ものかを附與しようとしたりする柄の人間ではありません。謂ふところの凡夫の生活こそ、私の本當の生活なのです。私は今此の所謂凡俗の生活のうちへ、自

身を托さうとするのです。

私は人生の眞理は外的生活の客觀的研究の結果として來る發見によつて攫まれるものだと思つた事もありました。又それは理知の導く思索の結論として得られるものだと思つた事もありました。けれどもそれらは好加減に他から注ぎこまれた借り物の考へにしか過ぎませんでした。けれども今の私には私自身の生活は私自身の持つて居た最も眞實な要求を自分の力の及ぶかぎり、良心のゆるすかぎりに完たして行く事より外にないと思はれます。永い間の自分みづからを顧みて、何が最も自分にとりて眞

一五

實な内的要求であつたかと云へば、それは矢張自分自身の精神生活の根柢と云つたやうなものに外ならなかつたとしか思はれません。日に荒れ果て行く曠野の如き世界のあなたをなたへと、さまざま、なからびやかなものに眩惑されて引き廻はされながらも、なほ且常に限りないさびしさと冷たさを感じつつ、あてどもなく命の泉を求めてさまよふ放浪者——それが過去の私でした。他のものを求むべき世界に向つて自分の欲するものを求めつゝも、もう私のほしいものは此の世になくなつたのかと悲しみ嘆きつゝあつたのが過去の私でした。けれども、今の私はその

新らしい世界の蔭に、永遠の心の故郷の依然として存して居る事をおぼろげながら知り初めました。私はその自分の心の故郷へ歸つて行くのです。もと居つた時のそれを二重にした懐さと親しさを感じつゝ、私はその所謂心の故郷へ歸つて行くのです。

年老いて頼るところなき一人の父、我がまゝな私自身から去れと云つても去らない三人の愛兒、一人の妻——せめてそれだけの自分の家族とだけでも平凡ながらに精神的な味のある朝夕を送り迎へる事が出来れば、それだけでも私は恵まれた一個の人間だと自分を思ふことが出来るや

うになるでせう。大した物欲を持たない私には、自分の肉體さへ丈夫であれば、自分の一家族を養うて行く爲めの働らきぐらゐは何とも思ひません。世間の事を考へないでもありません。又隣人共の過つた生活を憂ひないでもありません。しかし、何よりも先づ私には私みづからを如何に善良にし、私みづからの家族と自分との關係を如何に善くするかと云ふ事の外には、これと云ふ抱負もありません。而して此の善良な生活の底から、私自身の陥つた心と體との不健康を癒やしてくれる力の出て來る事を私は今切に望んで居ます。

今の私にとりては、外的な世界をどうするかと云ふことよりも、人間そのもの即ち私みづからを眞の善良な生活に導くことが最も切なる願ひです。少なくとも自分の子供にとりての善き父であり、自分の父にとりての善き子であり、自分の妻にとりての善き夫であり得んことが差し迫つた願望です。而もその善良と云ふことの内容は、これまで自分の理智的探求で新らしく知らうとして居た未知のそれではなくて、夙の昔から人間に解り切つて居た極めて平凡なそれです。即ち私は今迄辿つて來た徑路を此上辿つて行つてその結論として得て來べき新しい眞理に自

分の存在を従はせることの無理な努力を断念して、最も解り切つた最も平凡な最も一般的な意味での善良な一個の人間となる事に自分のあらゆる力を致さうと思ひます。

世界の進歩に貢献しようとしたり、世界を改造しようとしたり、多數人を開發しようとしたりすることは、到底今の私などの企て及ぶところではありません。さうかと云つてひたすら自己の官能的欲望や動物的本能に身をまかせて、どし／＼押し進んで行くと云ふやうな事も、尙更出来ることではありません。私にはすでに此の自分一個を如何にせば最も善く生かすことが出来るかと云ふ根本の信念

が缺けて居たのです。それなしには何事も安んじて爲し得ないところの、その根本の信念が缺けて居たのです。而もつひ先頃までの私は此の最も根本的なものを求めることの苦痛を回避して、徒らに自分の皮相な生活を切り賣りして居たのです。そしてその爲めに却て刻々に自分の人間的生活を破壊しつゝあつたのです。而もなほ自分達は選ばられた少數者であると妄想したり、何かしら特別に價値ある人間だと妄想したりして、辛うじて自らをゆるして居たのです。かくの如くして、日一日と私の最も内部的な精神的な求め、即ち愛の心が、蹂躪されて行くばかりでした。

たへがたい孤獨と空虚との悲しみが、刻一刻激しく私の内
部から湧き起つて來ました。

私は今何よりも此の内部の孤獨と空虚とを充たすこと
に全力を擧げて従がはなければなりません。自分みづか
ら一個の善良なる人間とならなければなりません。何等
確乎たる信念なき自分の精神に、何等かの確乎たる安定を
與へなければなりません。

『自らの姿を知らず

いたづらに

人の身をきづかふ子等よ

あまへ等は

やがて死ぬるであらう』

と歌つた名もなき詩人の言葉のやうに、私は今本當に自分
の姿をハッキリと認めなければなりません。他人のこと
や、世界のことや、社會のことを考へる前に、私は私みづから
の、た、ま、し、ひのありかを確めなければなりません。

私の今企てゝ居ることは、謂ふところの隱遁であるかも
知れません。けれども今の私にとりては、過去の私のやつ
て居た事がむしろ最も忌はしい隱遁であり、回避であつた
と思はれるのです。即ち自分にとりて最も内部的な最も

二一
根本的な要求から回避せんが爲めに、徒らに外部へ外部へと乗り出して居た——それが過去の私の本當の姿だつたとしか思はれません。

此の小冊子は其の忌はしい過去の私を、私みづから鞭打つ爲めに書いたものであります。

大正五年一月廿二日

相馬昌治

此の一卷は初め私自身のこれまで知遇を辱くして居た少数の先輩、知己の方々にだけ見ていたゞくつもりで書いたのですが、私の最も親しい友人の一人であつて、同時に私を今日の決心に至らしめるために多大の力を附與してくだすつた田中純君の切なるすゝめによつて、同君の力で公に出版することになつたわけであります。

なほ本書を公にするに際しまして、私はこれまで何かと面倒を見ていたゞいたり、又は誠實な友愛から一個の人間としての私をいたはつてくださった多くの先輩友人の方々、わけも坪内逍遙、高田早苗、島村抱月の諸先生、中村星湖、小川未明、田中純、吉江孤雁、片上伸、長谷川天溪、釋眞戒、釋宣猷、草藥全宜、橋静二、本間久雄、野尻抱影、稻毛詛風、光用穆、等の先輩友人諸氏に向つて深厚な感謝の意を表する次第であります。

最後に相互の永い交友の間に、私をして絶えず人間心の高調を感じさせる事をさまじくな方面から助けてくださつた小川未明、中村星湖の二君に特別の感謝の念を捧げると同時に私は又最近の私の心に久しくのけもの同様に居た宗教的情緒の力強い復活を得させる爲めの得難い善知識となつてくださった田中純君母堂に向つて、深大なる愛慕の情を表する次第であります。

今後の私はこれまでのやうな焦立たしい生活を脱して久しく遠ざかり勝ちにして居た内省的生活のうちへ自分の身を容れることによつて、その善い感化を受けようと思ひます。随て文筆業者としての私は私自身を今日の心持まで導いてくれるに與つて力のあつたトルストイ其他の著作の翻譯以外、出来る

だけ何も書いたり喋舌つたりしない決心です。心から親しみたいと思ふ書物も、法然、親鸞、兩上人の遺文、聖書、ツルゲーネフの或るもの、ドストエフスキのあるもの、トルストイのあるもの、二宮夜話、古事記ぐらゐるものです。田舎生活の感化と此等の書物の感化で私の心身の傷が少しでも癒やされたと感じた時から、私は私の郷里越後の各地に今なほ残つて居る傳説を事情のゆるすかぎり聞いて廻らうと思つて居ます。稀有な傳説的郷土に生れた私は、嘗ては私自身の心の根を養つてくれた、そして永い年代を経て幾多の人々の生命の糧となつて來た傳説を書き集めることによつて、どれくらゐ自分を純化することが出来るかとそれを楽しみに思つて居ります。

還元録

相馬御風

『偉大なる理想の爲めに、身の安泰と人生當然の報酬とを犠牲とせし人は、死の姿始めて現前して、萬事は空ぞと説伏せんとする時、常に急變激動の感を経験す。疑ふらくは、世の最も強き靈魂の湛へたる、而かも往々にして鋭きこと利刃にも似たる、感深き追念の數々は、此の刹那彼にも又臨みしなるべし。彼は眺爽かなりしガリラヤの

還元録

還元録

二

清泉を思出でたりや。其の樹蔭に休らひけむ葡萄、無花果樹の林をもや。或は喜びて彼を愛したる年少き乙女子どもか。或は又萬人に許せし歡喜をば、獨り己が身に拒みたる、殘酷なる運命を呪ひたりや。或は自らの天性の餘りに崇くして、己が「偉大」の犠牲となりしを悔い、眇たるナザレの一木匠に終らざりしを悲しみしや。我等は知らじ。此等内面の苦悶は、悉く明らかに、弟子共には封ぜられたる一章なればなり』

——ルナン著綱島梁川安倍能成共譯『耶穌傳』第三二三頁——

一

私は夙に「これ」を書いて居なければならなかつたのだ。實際、私はこゝ三四年の間に、幾度「これ」を書かうと企てたか解らない。書くと言ふまでに至らないまでも、私は幾度「これ」を自分の交つて居る人々に向つて告白しようと思んだか解らない。そしてその當然の結果としての自分の生活改造を斷行しようと思度望んだか解らない。けれども今日に至るまで私はたゞの一度もそれを斷行することが出来なかつたのだ。

還元録

三

その所謂「これ」とは何であるか。私が今茲に出来るだけ
卒直に語らうとして居る「これ」とは何であるか。

一言にして之れを盡せば、私と云ふ者の虚偽な、やゝ、
からつぽな、殆んどもうゆるしがたい妄想者である」と云ふ
ことの告白である。そして此の切實な告白と共に、これま
で自分の罪を犯して來た社會の一圈内から、斷然自分の身
を退けて、眞實に自分と云ふ一個の人間を純化し善化する
ことに全努力を集注しなければならぬと云ふ——その
事なのだ。

小學校に入る前の幼年時代の私の生活については、ほん

の斷片的な印象が僅かばかり私の記憶にあるに過ぎない
が、小學校から中學校へ、中學校から大學へと轉じ進んで來
た私の學生時代の生活の大部分は、機械的な摸倣的な空虚
なうは、つ、いたものであつた。學問に對する眞實の執着も
ない癖に、私は世間に時めいて居る學者のやうな者になら
うと望みもした。自發的でない、たゞもう自分の同輩に對
するケチな競争心や周圍の人々に對する虚榮心や又は臆
病から、半ば以上はいや／＼ながらの勉強もした。そして
そんな風な勉強の仕方では、僥倖にもかち得た試験の成績を、
さも／＼自分の眞實の熱心の結果であるやうな顔で誇り

もした。學校では私は一度の落第をも経験しなかつたばかりでなく、所謂成績もさう悪くはなかつた。又幼い頃から世間の人から批難されるやうな所謂悪い事もあまりしなかつた。中學から大學へと進むにつれて私は殆んど凡ての青年の最もおぼえ易いさまざまの動物的な快樂をも、何かと偷み嘗める事をおぼえた。而もそれら凡ての私の生活の缺點があつたにも拘らず、私は私の交つて居た多くの人々から、比較的善良な青年であり、操行の正しい學生であると云ふやうに見られて來た。その爲めに自分より年少の學生の幾人かの監督を頼まれたことさへある。

けれども今日から願れば、さうした私自身の青年時代の外形は、主として私の臆病性と胡摩化し上手との現れに外ならなかつたのである。一歩進めば——つまり今少し自分が正直であるか大膽であつたならば——かなりに悪い事となるやうな事を爲しながら、なほ且自分だけは——勿論他の人々にはかなりな悪い結果を與へながら——さうたいした躰きもない有様で過ぎて來たのは、悉く私の臆病性と胡摩化し上手との致すところであつた。

それでは、私は私のさうした生活の仕方にも、みづから満足して居たかと云ふに、決してさうではなかつた。私の青年

時代には常に不徹底の不快さがあつた。常に周圍に對する不安があつた、常に世間の評判に對する危惧があつた。世間の人々——本當に私と云ふ者の真相を知らない——世間の人々からの信用は、ほんの上つ皮だけの虚榮心の満足に私に與へては居たが、私の内心に於ては常に云ひ知れぬ一種の羞恥があつた。此の内心に於ける云ひ知れぬ羞恥の情、自責の感は、私にとりて最も恒有的のものであり、最も眞實なものでありながらも、私は常にそれを回避し若くは糊塗しつゝ、寸前の外的小安を偷むに慣れて來た。かくの如くして私の學生時代は、虚偽より虚偽への推移、

卑劣な少満足と、自責自羞の回避との歴史であつた。無論このやうな私にも時あつて人間性そのもの、純眞な發露があるにはあつたし、少しばかりは本當に善い事をしたこともあつたであらうけれども、而も顧みて現在の私の心に最も切實なものは、主として前に述べたところのものである。即ち臆病、輕佻、胡摩化し——私の青年時代の最もおもな性格の特色を、此等の數語を以て蔽ふことが、現在の私にとりては、最も重要なことであり、最も眞實なことである。

これについて或る人は云ふかも知れない。「君のその臆病も輕佻も胡摩化しも、單に君みづからばかり責を負ふべ

きものでなくして、君をして、しかあらしめた者が他にあるにちがひない、君の教育はどうであつたか、君に對する世間の仕向はどうであつたかと。けれどもそんな事を考へたり、詮索したりすることが、現在の私にとりての主要問題ではない。今更それを詮索して見たとて、私のその過り過つた生活がどうもなるものではない。私にとりては、私みづからの過去の生活を、私みづから批判し、自省し、而して眞に根本からそれを改造することが、何よりも先になさねばならぬ事なのだ。而してこれを——此の一事をなさないでは、何事も意味がないのだ。私にとりては——現在の私に

とりては、私みづからを鞭打ち、私みづからを新らしい、正しい道に進ませる事を外にしては、何事も無意味なのだ。

多くの人々はそれをやつて居る。多くの所謂生活の改造者はそれをやらうとして居る。「罪は自らに無くして境遇にあり、社會にあり、歴史にあるのだ」——かう云ふ眞理を楯とする多くの所謂生活改造者は、それをやつて居る。これまでの私も、さうした立派な眞理に時ありて誘引されてさまざまの事を言つたり爲たりして來た。けれども、それが何になるか。それでどうして自己に最も眞實な自責の苦痛を免れることが出来るか。自分ではそれが最善の道

であるかのやうに思はう／＼と努めても、結果は却て自分をます／＼虚偽のうちへ引きずつて行くのだ。

今日の私にはそれが出来ない。自己に最も眞實なもの何であるかを突きとめた今日の私には、最早一刻もそれは出来ない。何となれば、それは實は自己に最も眞實なものからの回避に外ならぬからである。

『我は如何なる人間であるか、我は如何なる生活をなしつゝあるか、我は果して我が他に對し、社會に對して要求して居る如き人間であるか、要するに我みづからは眞に一個の「善き人」であるか』

多くの人は、此の最も簡単な問ひに對する返答と、その責任とを回避せんが爲めに、眼を外界に向けて、そこに凡ての邪まなるものゝ影を視ようとするのである。かくして辛うじて自責の苦痛を忘れんとする。それを忘れることを是認せんとする。世の所謂「人道の爲め」を叫び、社會の改造を叫び、「多數人の爲め」を叫ぶ多くの人々のうちには、此の「自己の眞實」を回避せんが爲めにしかする人々が少なくな

る。

けれども、私は思ふ。萬人を救はうとして騒ぎ廻ることよりは、唯一人の人間を躓かさなうことの方が貴いのであ

る。自分みづからの爲めに犯す罪よりは、萬人の爲めに犯す罪の方が重いのである。

『汝みづからを善くせよ、汝みづからを完全にせよ』

その外に何があるか。世界に若し罪ありとすれば、それは同時に我みづからのうちにも在るべきである。而して私達にとりて最も重要な殆んど唯一なとも云ふべき事は、そのみづからの内部の罪を滅ぼすことであらねばならぬ。

『汝みづからを善くせよ』

此の最も簡明な眞實を回避せんが爲めに、如何に多くの人々が善の名の下に眞の名の下に、幾多の虚偽と罪惡とを重ね

つゝあることぞ。而してつひ昨日までの私みづからも、實にその最もゆるしがたき欺瞞者の一人であつたのである。

『汝みづから眞の人間たれ』

この一語を回避し、その修養を回避せんが爲めに、私は如何に多くの罪惡を過去に於て犯して來たことぞ。

二

大學では私は文學を學んだ。併しその當時の私には眞に心から將來文學者となつて社會に貢献しようなど云ふ考はあまりなかつた。しかも私の肉體内に醸成されつゝ

あつた青春は、その當時の文壇の一分野を占めて居た世の所謂「星董派」なる感傷的文藝に私を親ませた。私は人真似をして歌や詩を作つた。無論時々には内部から湧き上る純眞の情感に身も心も打ちまかせて、小鳥と共に歌ひ花と共に咲き且つ散ると云つたやうな氣分に浸つて、ある時は泣きある時は笑ひもしたのであるが、しかも自分の作つた歌に對する私の心持、若しくはみづから歌を作らうとする自分の心持は、多くの場合不純極まるものであつた。卑しい摸倣心、劣等な虛榮心、色情の醜さを胡摩化しつゝ、何等かの小満足を得ようとするずる、且臆病な修飾心……而し

てかう云つた風なさまざまな卑しい欲情が、私を驅つて或は自分の作つた歌や詩を世間の雑誌に投書させ、或はさう云つた種類の人々の團體へ加入させ、或はさう云ふ仲間内でのつまらない勢力争ひの仲間入をさせ、或は又自ら仲間を造つて雑誌を發行させたりした。その當時の私の行動の大部分は、今日から顧みてたゞ／＼冷汗をかゝすやうな事ばかりである。無論前にも云つた如く、その當時の私にもどこかに純眞な人間的感情が生きて居た。私をして詩歌を愛させて居た根本のものは、その本當の人間的感情に外ならぬ事は、今日でも固く信ずるところである。しかし、

其の當時の私の生活の大部分は、さう云つた心の奥底に生きて居る純真なものに對する奉仕ではなかつた。その本源は純真なものであつたが、外部に現はれた私のさまざまの行爲の大部分は前に挙げたやうな卑しい心の左右するところであつたのだ。

私はさう云つた風な卑しい心から出た私の行爲を、或る程度まで自ら知つて居ながらも又時にはそれを悪い事だとさへ思ひながらも、なほ且世間の人々に對する虚榮心などから努めてそれを是認しようとして、さまざまの理論を考へた。そしてさうして造り上げた理論を巧みにあやつ

る事によつて、或時は老いたる一人の父が汗水たらして得た金や、百姓の血を流すやうな苦しい労働から絞り取つた財産のうちから、何かにつけて浪費する事さへ平氣でやつた。

あゝ、此の怖ろしい理論——その後の私の生活の過誤の大部分は、此の自分の行爲を強ひても是認しようが爲めに、拾ひ集めたり捏ね上げたりする理論製造術によつて成されたのである。

二十四歳で私は大學を出た。そして私は直にその當時わが思想界文學界に最も重きをなして居た一文學雑誌の

記者として傭はれる事になつた。そのやうな大雑誌の記者となる事は、その當時の私自身にとりては全く意外な榮譽であつたし、學友はじめ周囲の少なからぬ若い人々からひとしく榮譽とすべき事だとされた。私は非常に得意であつた。それと同時に私には何かしら常に書かなければならぬ生活が初まつた。一つは職業の爲め即ち金を得る爲めに、一つは虚榮心の爲めに、一つは摸倣心から更に今一つは何か知ら自分にも解らぬ心の働きの爲めに……かくして私の理論製造術は、更に一段の發達をなすべき機會を得た。私は書いた。何か知ら書いた(全くそれは「何

か知ら」と云ふより外ない事ばかりである)。それと同時に所謂文學者としての私の生涯も開かれたのである。私は又その頃世間の所謂新らしい人々の間に多く讀まれて居たり、賞讃されたりした外國や日本の多くの書物を讀みあさつた。それらのことには實に驚くべく複雑なものがあった。さまざまの主張、さまざまの情緒、さまざまの思想が、ごつちやになつて私の頭や胸の中へ流れ込んだ。選擇や判別どころか、何が何であるかさへまるで解らぬほどにさまざまな思想や情緒が、私の心の眼を眩惑させた。私は何もかも受け入れた。私の頭の中はそれらの消化し切れな

いさまぐの思想や情緒で一杯になつた。そして正しく私はその頃から精神的消化不良症に罹つたのであつた。

併し私の生活は何か知ら書かねばならぬ生活であつた。何かしら一つの主張を世間に示さねばならぬ生活であつた。それには何か知ら一つの方向へと自分の知識なり思考なりを集めて行かなければならない。けれどもその當時の私——いやずつと以前からの私——には、真に自分の中へ受け入れるもろくの知識やもろくの思想やもろくの印象を統一すべき根柢がなかつたのである。真に一個の人間として生きて行く上の最も大切な其の生活の

根柢がなかつたし、又與へられても居なかつたのである。

そこで私は強ひても何等かの統一を自分の思想表白の上
に與へる爲めには、やむを得ず自分に最も近い、自分と最も
密接に關係のある先輩達の取つて居る主張を採用しなけ
ればならなかつた。又かくすることが自分に最も安全で
あり、且最も容易だつたのである。即ち私にはあの頃に於
ける文藝上の所謂自然主義の主張が、最も安全な、そして最
も容易な思想統一の方針であつた。かくして私は文藝界
の末席にあつて肩を怒らしながら物を云ふ一個の自然主
義主張者としての一青年評論家となつたのである。

けれどもその當時の私の思想生活は、それだけが全面ではなかつた。世間に面して自分を明らかにした方面はそれであつたけれども、人知れぬ半面に於て、私はそれとは全く相反した生活を送つて居た。それは私が大學を出る凡そ一年半ほど前から、今は故人となられた聖僧釋雲照律師の座下に殆んど侍者に近い生活をして居た事である。此の事については、私はこれまでにあまり多く語つた事が無いから、今日に至つて此の事を云ふと多くの人はそのあまりに突飛なのに驚くかも知れないが、併し私自身としては此の事をかくも明白に語り得るに至つた事を衷心から喜ぶのである。

釋雲照律師は、實に不思議なほど立派な人格の坊さんであつた。さう云ふ聖い人格、その當時の私とは一見全く相容れないやうな人格の修道者と、その當時の私がどうしてさう密接な関係の下に置かれるやうになつたかについては、茲に一つのエピソードがある。私は大學の二年生であつた頃、小石川音羽の或る家に下宿して居た。そしてそこに居る間の、或る冬の日の朝私は血を吐いた。多分咽喉から出たのだらうとは思つたが、その前に一緒に自炊生活をして居た友達が二人まで肺病で仆れた事があるので、私の

心配はすぐにその事と結びついた。早速私は或る醫師の診察を受けた。醫師の言葉は甚だ曖昧であつたがどちらかと云へば暗に私に轉地療養を勧めて居るもの、その爲めに一時廢學せよとまで云はうとして居るものゝやうに聞えた。私は更に第二の醫師に見て貰つた。その醫師の言葉もほゞ同様であつた。私の心は暗黒のどん底へ落ちたやうな氣がした。しかしその時は殆んど自分と云ふものを考へずに私にとりての唯一人の家族であるところの老いた父の事が考へられた。北國の薄暗い家に、唯一人で淋しく暮して居る父の事が考へられた。そしてそれと同時に

に私は今更そんな事を知らせて、あの孤獨な善良な父の心を掻き亂してどうなるものかと云ふやうな事が考へられた。廢學や休學などは斷じていけない、轉地療養など思ひも及ばない事だ、俺はこのまゝ學生々活をつゞける、そしてどうにかして病氣に打ち勝つて見せる、つひにはさうまで考へた。併し私の心の不安は、少しも薄らがなかつた。さなきだに小心な臆病な私は、殆んど氣が狂ひはしないかと危ぶまれるほど悶えた。飯も食ふ氣になれず、眠る事も出来なかつた。

丁度その時、その私の下宿して居た家の主人のところへ

時々訪ねて来る一人の坊さんがあつて、私の事を傳へ聞き是非一度遇つて話したいと云ふ話が宿の女主人からあつた。さう云つた親切な言葉を渴し求めて居た私は、むしろその事を自分の方から懇願した。坊さんがやつて來た。眞言宗の坊さんで名を眞戒師と云つた。生死別なき事についてのさまざまな法話が、不安に暗くなつて居る私の心にゆるやかに流込んだ。何事にも感じ易い私は矢張さうしたこれまでの自分に縁遠いものゝやうに思はれて居た話にも、ヴィヴィッドに感じ動かされた。何よりも嬉しかつたのは、その話よりも、その話の包んで居る教理よりも、むしろ

それを語る坊さんその人の温容であつた。そのふつくらとした顔、そのゆつたりとした様子、そのやさしみに充ちた平和な眼——それに接して居る事その事が、私には云ふべからざる心の平安を與へた。唯一度の面會で、私はすつかりその坊さんに抱かれるやうな氣持になつた。

ところが何たる嬉しい事だつたらう。その坊さんは、その日から毎日私を訪ねて來てくれた。そして毎日およそ四五時間宛私の枕元でさまざまな世間話にまぜて何かと生の徹底境についての話をしてくれた。かくすること約十日間、私は殆んど全く病氣の事を忘れるやうになつた。

私の心にある特殊な人生観が築き上げられたと云ふではないが、唯何となく安心したやうな気分が、一日と私の心を病氣の心配から離れさせた。幸ひその後一回も血が出なかつたばかりでなく、熱も平温を超えるやうな事がなくなつた。私はいつとなく醫師のところへも行かなくなり、平氣で學校へも通ふやうになつた。

かくの如くして私の心はいつとなくその坊さんに親しむやうになり、その坊さんに連れられてその坊さんの部屋のある目白僧園へも遊びに行くやうになり、やがては雲照律師にも接するやうになつた。雲照律師に接すること數

回、私はどうしてかひどく律師の愛を受けるやうになり、ひには律師の著書は殆んど凡て私の筆で書くやうになつた。そしてその後ずつと私は律師の愛を受けつゝ、最後まで律師の生活に接して居た。その三年の間に、私は故律師の生活を尊いと感じ、美しいと感じた事は幾十百度であつたか知れない。純潔たらんとする爲めには、寸毫も自己を假借するところのなかつた故律師の内省的な生活が、如何に深く私の心を動かしたか知れない。

而もその當時文筆の人としての私はこれを云はずして、彼をのみ云つた。内心忍ぶべからざる矛盾の苦しみを感

じつゝも、なほ且自己の卑しい名利の爲めには、私はむしろその矛盾の表白などをしてはならなかつた。自分達の仲間の氣分に、わけもなく雷同し附和して、私は一種のうはついた熱し方を以て、さまざまの理論を捏ね廻した。そしてほんの僅かばかりの金錢と、ほんの僅かばかりの名聲(?)を得て、自ら得々として居た。

尤も私とその當時雲照律師によつて學び得たところを、世間に向つて表白しなかつたのには、以上の他にも理由がある。その一つは律師が私に教へてくださった事は、あまりに平凡な事であつたからだ。今更聞かなくても知つて

居るやうな事ばかりであつた。今更云ふ必要のないやうな解り切つた事ばかりであつた。「我が子を愛せよ、他人を敬へ」「邪淫する勿れ」「嘘を云つてはいけない」「詭辯を弄してはいけない」「盗みをしてはならぬ」……と云つたやうな今更云ふまでもない事ばかりであつた。それを律師は遇ふ毎に繰り返した。私は無論それらの教を全然間違つた事だとは思はなかつた。併しあまりに平凡だ、そんな事を云つて居るだけでどうして偉くなれるものか、雲照律師だとして今日のやうに偉くなつたのはそんな平凡な事を云つたり爲たりして來たばかりではない、もつと他に何かあつ

たにちがひない、それは何だ……かう云つたやうな疑ひが絶えず私の心の奥にあつた。しかし、それを面と向つて雲照律師その人に質すほどの勇氣のなかつた私は、常に不徹底な氣持で相接して居た。それで居ながら、律師の前へ出ると不思議に私は跪まづかされた。漫然としては居たが、併し隙間のない氣持で、私は合掌して律師その人を拜んだ事も幾度であつたかわからない。

『あの律師の持つて居る力は何であらう、私をして思はず跪まづかせるあの尊さは一體何であらう、律師のどこにそれがあるのだらう』

私は常にそれを怪しみ疑つた。

『律師の説かれることは、實に平凡極まる事だ、俺はそれを全然間違つた事だとは思はないが、併しそれが俺をこんなにまで魅する力を持つて居るとは思はない……いや、ひよつとすると俺は何か囚はれて居るのかも知れない、何か俺をだまして居るものがあるのかも知れない』

私はこんな風にも考へた。

『だが、もしさうだとすれば、そのだまして居るものは一體何だ、律師の言葉のうちに時として甚だしい不合理があるのも俺は知つて居る、それで居ながら依然として俺に

は律師のあの何とは知れぬ魅力を斥けるだけの力が無い、一體その魅力は何だ』

併し私にはその何であるかは、全くわからなかつた。何だかわからずに、私は依然として魅せられて居た。そこで、私は時々はその何とも知れない魅方を、永い間の歴史でつくられて来たあの一派の宗教のさまざまの儀式や、さまざまな裝飾や、さまざまな習慣や——つまりあの眞言宗と云ふ宗教の一派が造つて来た一種の複雑な藝術的な雰囲気、歸して見た。そしてそれが一番私を満足させた。多勢の老いたる、又若き僧侶達が、殆んど人間業でないやうな不自

然な戒律的禁慾生活を苦行しつゝあるのに對しても、私はそれを一種の藝術として眺めた。そしてその觀照的態度は、私をして安んじて自己心内の矛盾を回避させた。

かくして私は依然として文藝上の自然主義説の元氣の好い雷同者であると同時に、律僧雲照の弟子であつた。そして時には潜越にもかのフランス自然派の驍將であつて同時に『大寺院』の作者であつたユイスマンその人の影を自分のうちに擬し見て自らひそかに嬉しがつたりした。かくの如くして私は、自分の師事して居るその人の口から、遇ふ度毎に發せられる最も重要な訓戒を、たゞ其のあ

まりに平凡なるが故に無造作に聞き流した。又それがあまり平凡であり、陳腐なるが故のみで、それを他人にも傳へなかつた。偶々雲照律師について又目白僧園の生活について他人に語るやうな事があつても、私はたゞその神秘的藝術的方面のみを、さもく尊げに語るに過ぎなかつた。何となれば、その當時の私はあの平凡な雲照律師の訓戒を他人に語ることは、一面雲照律師の價値を傷ける事であると同時に、他面私みづからをつまらない人間と思はせる事であると思つたからだ。雲照律師の教へに對しては私はたゞ「然り」か「否」かを以てより他に答へる言葉がなかつた。

た。律師の言葉は、それほど簡明であつた。けれども私は「然り」とも「否」とも答へるとが出来なかつた。「然り」と答へれば、すぐその瞬間から私の生活全體の上に大變化が起らなければならぬ。「否」と答へて、全然反對の方向へ突進して行くことは猶更私には困難であつた。そこで私は「然り」でも「否」でもない、全く別な一つの脱け口を見出さなければならなかつた。其の當時の私の理論は、悉くこの「然り」と「否」との何れをも云ひ得ない自分の心狀を、何とかして巧みに尤もらしく説明しようとする手段に外ならなかつた。

かう云つた風な私の心状から生れたさまざまなもの、統一するための都合の好い觀念が、其の當時私達若い文學者の間にいつとなく造り出されて居た。それは『新』の觀念であつた。何でもよいから、新らしいことが善いとせられた。「新は眞なり」と云つたやうな詭辨さへ平氣でゆるされる程だつた。

その當時私自身、及び私の周圍の人達の生活状態を、私は今烈しい恐怖と嫌惡との念なしには憶ひ出すことは出来ない。自分達の生活にとりて、眞に何が善であり何が眞であるか、についての根柢からの確信のない、無數の所謂解放

された新人達がその根柢の確信を外にしては何の意味もなさない『新』と云ふ唯一つの漠然たる觀念の下に、如何に取りとめのない所行を敢てし、徒らに人心を攪亂し、言論界をざわつかせるやうな理論の製造に忙しかつたことぞ。

而もそれらの人々の多くが、自分みづからの空虚を糊塗し回避せんが爲めに、いかに聲高く、時代の爲めを叫び、人生の爲めを叫び、眞理の爲めを叫び、藝術の爲めを叫び、若くは萬人の爲めを叫んだことぞ。

かくの如くして、今や何が得られたか。何が眞によく私達の心の空虚を充たしてくれたか。

三

その頃の私達の間には、更に「懷疑」とか「虚無」とか云ふ言葉が、いつとなしに流用されるやうになつた。いかにも、これこそその當時の私達の心状には、最も都合の好い言葉であつた。

『世に絶対の眞理など、云ふものはない、絶対の權威など、云ふものはない、絶対の善など、云ふものはない、このあるがまゝの生活こそ凡てなのだ、悪いものを求めて苦しむよりは、あるがまゝの生活に引きずられつゝ、その間

から得られるだけの快樂を得て行けばそれでよい、それより他に仕方がないのだ。』

かう云つた風な漠然とした考へが、その當時の多くの人々を支配した。官能派とか、享樂主義とか、「あきらめ」とか、「デカダン」とか云つたやうなさまざまの言葉の盛に流用せられるやうになつたのもその頃からである。

「懷疑」「虚無」「あきらめ」……實に堂々たる言葉である。古今東西に亘つて、如何に多くの所謂偉大なる人々が、この心状を経験したことであらう。釋迦も、トルストイも、フロアベエルも、ゲーテも、法然も、親鸞も、皆一度はこの「懷疑」とか「あ

きらめとか名づくべき心狀に墜ちたのだ。熱意ある眞理追求者の一度は陥り勝ちな、此の意味深い心狀——けれどもその當時の私達仲間の多くの人々の陥つたと云ふ懷疑的心狀はそれであつたらうか。その本當に深い苦しみと悩みとを世人に向つて訴へなければならぬほどそれほど熱烈な眞理追求の一路を辿つて來た者が私達の間にあつたらうか。懷疑を口にし、虛無を説かなければならぬほど、それほど多く思索や研究や冥想や探求や讀書やを成し了せた人が、その當時の私達の間、に幾人あつたらう。

他の人々の事は、私は云ふまい。私自身はどうであつた

かと云ふと、それは實に唾棄すべきほどの状態にあつた。貧弱極まる知識、胡摩化しの多い薄つぺらな求道、生活に對する好加減な執着、小つばけなさまゝの欲望……口にすると、ころは流行に引かれて讀み漁つたほんの僅かばかりの歐洲近代文藝の著述やその當時人氣のあつた某々諸氏の作品や論説の口眞似に過ぎなかつた。たゞ自分の好加減な心持で營んで居た不徹底不充實極まる日常生活に、何等の改造的努力を加へずに、そのまゝ、我みづからを乗り出させる爲めには、其の所謂「懷疑」の告白が最も都合よいものであつた事は事實である。而もその事實を我みづから

充分意識しなかつたその當時の私は、かくすることこそ實にかのヨーロッパ近代文藝の所謂先驅者達と同じく此の日本國の文藝に新開拓を興へ、新日本の青年の心を一新させる事であると思ひ込んで居た。又かく思ひ込むことによつて、辛くも自分を世間に價値ある人間だと偽り思つて、それでみづからの空虚を胡摩化して居たのである。

『なに、俺達が物を書くのは、虚名と金がほしいばかりさ』かう云つた風な事まで平氣らしく口外しながらもその實他人から自己の作品に少しでもケチをつけられる事に戦々競々として居る人達さへ少なからずあつた。ところが

私などは又それよりも劣等で、さう云つた風な恥づべき行為をさへも、なほ心中ひそかに羨ましく思ふほどであつた。

『俺も早くあんな事を云つても世間を渡れるやうな大家になりたものだ』

そんな風にさへ考へた事があつた。今からその當時の事を思ふと、私は此の私の身をハツ裂きにしても嫌らないほどな我みづからに對する烈しい憎惡を感じずには居られない。

『自分の子の可愛さ』自分の親の懐しさ』自分の妻の可愛さ』さう云つたやうな最も平凡な自分の心狀をすら、その

平凡なるが故に、人前を憚つて云ふことの出来なかつた人が如何にその當時の文壇に多かつたであらう。

「彼奴は古い、彼奴は平凡だ、彼奴は吞氣だ」

さう云はれる事を怖れることから、如何に多くの人々が自己を欺き偽つたであらう。

私も實にその最も忌はしい部類の人間の一人であつた。而してその何物にも絶對的價値を認めず、何ものゝ精神的權威をも認めないと云ふ都合の好い理論の下に、私は巧みに自己の責任をのがれつゝ、大して深入りすることなしに、さまざまの安價な肉欲的快樂を偷み嘗めたのである。け

れども眞に自己の内部に立ち入つて考へる時、私は常に空虚であつた。常に不満であつた。而もその空虚とその不満とのどん底まで探り入つて、何故空虚であるか「なぜ不満であるか」を自省することの苦痛を回避せんが爲めに、私達は更に一層の自己欺瞞を重ねた。自分を鞭つ代りに世界を鞭つた。我みづから鞭つ代りに、他人を鞭つた。

此の自己の空虚を蔽ひ隠さんが爲めの理論と、自己を鞭つ代りに他人を鞭ち世界を鞭つに用ひた言説とは、私の文章をして巧みにも時好に投ぜしめた。私は一個の文學者として迎へられ、僅かばかりの金錢と、僅かばかりの評判と

を與へられた。私はますます何事かを書いて發表せなければならぬ生活の方へと誘はれた。

かくの如きは實に私の文學者としての生活の初期の状態であつた。このやうな状態にあつた間に私は結婚した。結婚に先立つて私は二度まで戀をした。しかしそれは殆んど戀と名づくる事の出來ないほど臆病な安價な卑怯な劣等な肉欲満足の一方法であつた。隨てそのいづれも醜い曖昧な始まり方で始まつて、醜い曖昧な終り方で終つた。併し私の結婚は全然世間並な方法で成された。過去に於てはまるで知らなかつた一人の女を、全然世間並な方法で

法律上の自分の妻としたに過ぎなかつた。物を書く上では因習を打破せよと云ふやうな事を叫びながらも、全然因習に従つた結婚をした私は、それでも大した苦痛を感じなかつた。むしろどちらかと云へば、内心少なからざる満足を感じて居た。而もそれを決して口に出しては云はなかつた。

こんな工合で私の結婚生活が始まつた。けれども私は依然として淺薄なる懷疑的的人生觀の表白者としての自分を、さまざまの雑誌や新聞の上に見出した。而も自分の周圍の所謂新らしい人々から何とか批難されはしまいかと

云ふ愧惧から家庭に於ける自分を強ひても不快な者に見せかけやうとした。他人に向つては無論結婚の喜びを語るよりは、むしろそのつまらなさを語つた。かくして私達の結婚生活の初期は自らを欺く爲めの冷淡、不規律、不愉快を以て過された。物質的に家庭を充實させると云ふやうな事をわざと避けた。家庭内の楽しみを豊かにすると云ふやうな努力を強ひて斥けた。その結果は何と云ふ惨めな狂態であつたらう。

而も私はさうした家庭の状態を、不自然な結婚そのものの罪に歸することに努めた。自ら欺きつゝ自ら陥つた其の當然の結果を、私はむしろ偶然な外部的原因に歸さうと努めた。其の結果は更にどうであつたか。

かくして私達の家庭は物質的にも精神的にも殆んど救ひ難いと思はれるほどの状態に陥つた。而も何と云ふ皮肉ぞ。さう云つた風な状態の下で、妻は妊娠しやがて男の子を産んだ。けれども互に(妻はさうでなかつたかも知れない)真に愛し合ふ事を欺き偽り且避けて居た私達夫婦にどうして真に自分の子を愛することが出来ようぞ。既に汚され荒され亂された家庭に、何として新らしい生命がのびくと育たうぞ。始めて出来たわが子、美しいわが

子に對して、精神的に墮落し切つた二人の親が彼を如何にして愛せんかと焦立ち苦しみつゝあつた間に、何も知らない幼児は僅か一年三ヶ月の短生涯を以て此の世を去つてしまつた。これが罪惡でなくてどうする。不治の病氣で死んだのだとだけで、どうして濟ますことが出來やうぞ。やむを得ない運命だとだけで、どうして濟ますことが出來やうぞ。ところがその當時に於ける私の身の不幸は、單にそれだけではなかつた。子供の死ぬ少し前に、私の郷里の家、老いた父が唯一人で淋しく住んで居た其の郷里の家が、何一つ残さずに焼き拂はれてしまつたのだ。現金から實

印までも悉く焼け失せてしまつたのだ。

自ら求むるが如くして陥つた腐つた、濁つたどぶどろのやうな私の心にとりて、此の二つの大きな不幸が、殆んど同時に起つた此二つの大きな不幸が、如何に的確な刑罰であつたらう。如何に嚴しい鞭であつたらう。

腐り果て、居た私の内部に、始めて微かながらに人間らしい心の覺めを感じずるやうになつたのは、其の時からである。

私の心の眼には、始めて一個の人間としての子が見え出した、始めて一個の人間としての妻が見え出した、始めて自

分と同じ一個の人間としての父が見え出した。私が人間にとりて我が子の如何に愛すべきものであるかを、理屈からでなく、真に全體としての自己に感じ知つたのは、實にその時からである。そしてそれと同時に、私は始めてその他の最も普通な人間生活の諸事實の根柢に嚴存する或るものを真に思ふやうになつた。隨て私は過去に於ける自分の生活の歩一歩人間としての墮落の道を辿りつゝあつたのでないかと云ふ、内部からの烈しい疑ひを感じ始めたのである。

應以童男童女身得度者

即現童男童女身而爲說法

私の愛兒の刻一刻死の淵へ近づきつゝあつた枕邊で、私の疲れ切つた心の耳に永く忘れて居た觀音經の意味深い一節が再び新たな響を以て傳へられたのも、その時である。

それを失つた事の悲痛がこれほどであるものに対して、つひに其の真に愛すべきを知らないで過して來た私自身の過去を、真に私みづから批判する時が始めて開けた。そして其の後の約一年間は、その自省の爲めに殆んど沈黙の裡に過された。

「愛すべき者を愛しないで死なした」

「自分を唯一つのたよりとして生きて来た者に自分は一體何を爲したか」

かう云つたやうな苦しい悔恨が絶え間なく私を鞭うつた。路傍に泥まみれになつて死んで居る亡兒の慘ましい姿を夢に見たり、荆棘の垣の間から手を出して泣きわめいて居る子供を夢に見たりするやうな事さへ幾度もあつた。けれども刑罰はつひに私の心を虐げたよりも、むしろ私の心を和らげ清めてくれた。私はこれまで覺えなかつた謙虚な心を持つことが出来た。そしてそのハンプルな心

持は、私をして亡くなつた愛兒の病氣を看護して居た間に経験した私の生活の記録をさへ書かせてくれた。「峠」と題した小説——私のこれまでに書いた創作のうちで一番長い創作がそれである。

私はその作物のうちで、出来るだけ謙遜な心持で私の亂れ迷つた内生活を告白したつもりであつた。そして自分のそれまでに書いたものうちで、これが一番自分にとりて眞實なものであると思つた。

併し、自分の子を失つたことのない人々や、その當時の文壇の主潮である自然主義の原理を創作上の原理として居

たある種の人達からは、私のその作は「センチメンタル」悪い意味でのであるといふ理由で批難された。私はその作の中で告白して居る自分の生活についての私の考へ方——それが善いか悪いか、間違つて居るか正しいか、と云ふ事について何等の批判をせず、その書き方や観察の仕方からのみ批判を下す其の當時の人々の態度を私はひどく不快に思つた。私の眞に知りたひのは、それでなく彼であつたからだ。

かくの如くして私は自己の眞實を語つた時に平凡であり幼稚であると批難せられ、自己の眞實を忘れてひたすら

外的な理論によつて頭を働かせて物を云つた時に却て賞讃せられた。

そしてそれと同時に、私の心内にはこれまで囚はれて居たものに對する抑へがたい疑ひと嫌惡とが起つた。

四

以上の事あつてから、今日でもうまゐる四年以上経過した。その間に私は十五六年も全然同居した事のなかつた父を郷里から呼んで同居するやうになつた。私達夫婦の間にはつき／＼に三人の男の子が生れた。此の四年の間に私

は又それ以前私の辿つて居た道とは全然異つた道を進まうとする努力をつゞけて來た。即ち所謂世の新らしい思想家達から見れば最も平凡であるとせられるところの愛の生活である。私は何よりも先づ此の最も平凡なる愛の生活を私の家庭内に於て實現したいと、絶えず努力しつゝ、進んで來たつもりである。性格の相違や、智識の程度の相違などで擾き亂される事のない、本當の愛の生活——それを私は私の家庭内で實現しようとする努力して來たつもりである。又それを成すには家庭と云ふ形の個人の集りが、最も困難な、しかし最も意義の深いものであると信じて來た

のである。

而してその結果はどうであつたか。それと同時に私は又私をしてその道を進ましめるに最も力強い導きを與へてくれると思はれたトルストイその人の著作を讀み味ふことを、私の最もおもな讀書欲満足の方法とするに努めて來た。更に又それと同時に文筆業者としての私の最も重要な仕事として、私はあらゆる方法を以て人間性そのもの、高調力説をなすことを選んだ。主義とか、外的制度とか、物質とか——さう云つた凡ての外的なものに囚へられな

いで、本當に人間同志が人間同志の心を以て互に相接觸す

ることが如何なる時代、如何なる境遇にあつても人間を最もよく生かす道である。それには各人悉く眞に自我の眞實にめざめ、各人悉くが眞の人間とならなければならぬ。外的制度とか、單なる知識上の眞理など、云ふものは、時代によつてどうにでも變つて行くものだ。人間は此の絶えず變化しつゝあるもののみ囚はれて、それを通してのみ互に相觸れようとするだけでは、到底眞の人間生活を営み味ふことの出来るものではない。然るに近代乃至現代は、殆んど全く此の外的なものに囚はれて、人間同志が本當の接觸をなし得ずに、互に相せめぎ互に相遠ざかりつゝある

時代である。そしてかくすることによつて將來に何か知らよりよき世界があると云ふやうな漠然たる進歩の夢想到に生きつゝ、しかも常に孤獨、而も常に不満なる時代である。その孤獨、その不満は一體どこから來るのであるか。今日は各人が眞にそれを自覺すべき時である。現在行はれて居る社會制度を唯一のものと考え、さまざまの外的知識から得て來た理論を以てその是認に努めて居る人々にとりては、現在の社會制度だけが眞に人間生活を幸福にするものと思ひ込んで居る。隨て制度を見て、人間を見ない。いかにも制度そのものが出来るには、そこにさまざまな複

OT

雑した意味があるにちがひないが、制度が人間生活の凡てにはない。むしろ人間の心とその制度を運用してこそ、始めて制度そのものゝ意義が完いのだ。ところが制度はあるが、それを真に運用すべき人間の心そのものが、枯渇して居る。制度は單に制度となつて了つて居る。生命がない。生命のある運用がない。

隨てこれに對して革新を叫び、改造を叫ぶ者も、亦眼中たゞ制度を見るのみである。制度さへ改めれば、人間が幸福な生活を營み得るものと思つて居る。

かくの如くして現代は、制度と制度との鬭争の爲めに、日

一日と豊かなる人間性そのものが、虐げられて行く。かくして人間は幸福を求めつゝ、益々幸福から遠ざかりつゝあるのである。階級と階級との鬭争、主義と主義との鬭争……かくして現代の人々は日一日と其の不幸を加へつゝある。

かくの如き忌はしい世界の状態は、一體どう云ふところから來るのであるか。私はそれを現代の多くの人々が眞に人間そのものゝ自覺を失ひつゝある事實に歸したのである。即ち謂ふところの客觀的知識に信賴し過ぎた結果つひに人間的感情そのものゝ枯渇を招致した、そこに現代

生活の不幸の起因があるのだと私は思った。

『私は今切に此の「文明の曠野」に立つて孤獨を叫ぶ真人の聲を待つ』

私はこんな事も云つた。

『願はくば私達の生活をして人間性なき機械の生活たらしむるなかれ。永久に若くして新らしき人間性の勝利を期せしめよ』

私は又かうも叫んだ。

そして私は更に思った。かう云つた風な時代に生れ合せた私達の本當に爲すべきこと、又なさねばならぬことは、

あらゆる障礙を排し、過りたる先入觀念を斥けて、本當の自我に歸ることだ。本當の自我に歸ることは、本當の人間に歸ることだ。そしてその本當の人間、本當の自我の根柢から湧き起る純眞な要求によつて、歩一歩眞實な自己の生活を押し進めて行くところに、私達は始めて本當の歡びを感ずることが出来るのだ。時代が如何に變らうとも私達のなすべき唯一の道はこれである。徒らに社會の爲めや世界の爲めを叫ぶ前に、私達は先づ自分みづからを此の道に進ませる工夫をしなければならぬ。自分にとりて最も手近かなところから、歩一歩その表現を期さなければ

ならない。

更に私は私達がかくの如き生々した生活の道に進むのに力を添へてくれる最も望ましいあるものを藝術に求めた。如何なる時代にありても常に新たに人間的感情を高調してくれるものは藝術であると私は思つた。各人の内部に眞の人間の感情を湧き上らせ永久に人間相互の若々しい接觸を助けてくれるものは藝術の力であると私は思つた。藝術こそ眞に最も力強い生の行進曲であると私は思つた。

而してかくの如き求め——かくの如き内心の求めを以

て、私は外部を見廻はした。しかし、そこに私は日一日と冷やかな生命のない外的機構と物質とに囚はれて、刻一刻に純眞豊潤なる人間的感情の泉を涸らしつゝある多くの人間の群を見た。富める者は富める者として、貧しきものは貧しきものとして、権力あるものは権力あるものとして、権力なきものは権力なきものとして、いづれも徒らに冷やかなる機構に囚はれ、生命なき物質に囚はれて、互に相争ひ相せめぎ、かくして日一日と此の世の美しきものを荒し傷ひつゝある所謂「文明の曠野」の無限の擴がりを見た。而も之れを救はんが爲めの道徳は日に日に形式に囚はれて、生命

を統一すべき何等の力なく、宗教又日々に冷やかなる理智の擒となりてそが本然の熱情を失ひつゝある。若き生命は絶えず伸長しつゝあるやうだけれども、そこに何等の潑刺たる人間性の湧騰を見ない。理智の發達日に見るべきものがあると云はれながら、個人の人格は日に外欲の卑しき擒と墮しつゝある。偶々虐げられたる多數人の爲めの社會革新を叫ぶものがあるけれども、その多くは矢張外物乃至單なる外的知識の擒であつて、身みづから人間としての純眞性を失つて居る。主義と主義との争ひ、階級と階級との争ひ、個人と個人との争ひ——何れか外物の爲めの卑し

い闘争でないものがあらう。人と人との集合はある。併しその多くは方便の爲めの交り、功利の爲めの交り、又は外的なものに餘儀なくされた交りであつて、眞に人間と人間との交りは時を追うて失はれつゝある。權利の主張、義務の強制あつて、愛の高唱、人情の謳歌は聞くこと稀である。宗教家や教育家や藝術家までが法律を楯として相争ふを辭せないほどの世の中である。吾々は一體どこに向つて本當の人間の道を訊ねたらよいか。保守せんとするものも、亦革新せんとするものも、共に多くは形式の奴隸、知識の擒である。

彼等は云ふ。

『人情や愛だけで世の中が善くなるものか』
と。けれども

『人情と愛なくして、何事か果して世の中を善くし得るか。人間としての相互の接觸なしに、どうして眞の世の中が解るものか。』

人間性を解放すると云ふことは、人間をして何も無い世界へ移すと云ふことではない。むしろあらゆる外物を人間性によつて抱擁することを云ふのだ。自分みづからが何物にも囚はれない、本當の人間となることを云ふのだ。

各人がおのれの欲するところに従つて則を超えずと云ふ境致に生きることを云ふのだ。その個人的修養が、果してどれだけ眞に現代に行はれて居るであらう。むしろ多くの人は此の最も困難にして、而も自己に最も忠實なる自省修養の苦痛から回避せんが爲めに、徒らに他を責め外物を悪視するのだ。

そこで私の最も多くの求めを寄せて居る現時の藝術界はどうかと云ふに、悲しむべきはこゝすらも既に、所謂客觀的知識の荒らすところとなつて、純眞なる人間的感情の高調を聴くこと極めて稀薄であり微弱である。甚だし

きは時代の卑しい嗜好に投ぜんが爲めに、即ち讀者とはいかなる事を最も多く好むものであるかと云ふ事の考を唯一のたよりのとして筆を執つて居る者さへ少なくない。制度を唯一の様に考へ、皮相なる形式的知識を本位として時代の風教を司ると稱する人々に、眞に何が善く何が悪しきかの批判をなすに足るべき人格の根柢なきは勿論、藝術界そのもの、うちにも亦眞に自己の人格を根柢として、眞に何が善きか何が悪しきかの批判を下す者が極めて少なく、かくして互に好加減な心持を以て、眞に戦はねばならぬ同志が、文壇と云ひ藝術界と云ふあばら屋の假住ひのうちには、

不徹底な雑居をつゞけて居る。藝術保護の聲は徒らに叫ばれても、何を眞に保護し助成すべきかについて確乎たる信念を持する者は極めて稀である。藝術の尊嚴は徒らに叫ばれても、如何なる藝術が、藝術のうち如何なるものが眞に尊嚴なりやを確乎たる信念を以て答へ得る者は殆んどないのである。

かくの如く外に向つて求めた私の心は、次ぎ／＼にきびしい失望を以て報ひられた。私は凡てを疑はないでは居られなかつた。けれども、その疑ひ——その激しい疑ひは、更に／＼烈しい力を以て私自身の上に迫つて來た。

『さう云ふ、汝自身はどうだ？』

かう云ふ鋭い叱聲が、私みづからの心の全體に響き渡つた。
『さうだ、俺みづからはどうだ、人に向つて物を説くだけの資格が俺のどこにある、時代の革新を主張したり、人間性の改造を主張したりするほどの資格が俺のどこにあるのだ』

茲に至つて、私はたゞもう自分の身を投げ出して大地にひれ伏すより外に仕方なかつた。私にはもう今迄のまゝの生活が、どうしても續けて行けないものゝやうに思はれた。
『一切を抛て、そして何よりも先づ汝自らを一個の人間と

せよ。そして眞に何が善きか何が悪しきかを學べ、行へ。一切の始めは、そこにある。一切の終りも亦そこにあるのだ』

茲に至つて、私は眞に行き詰らざるを得なかつたのである。

五

私の内部に以上述べたやうな根本的變化の現れ始めなのは、今から三年前の事である。今だから云へるが、文筆業者としての私はその頃から自分にも意外なほど所謂世間受けがよかつた。金も以前よりはずつと餘計に得られた。

私は雑誌記者として又著作業者としての從來の仕事の他に、更に大學の教師と云ふ世間的にはかなりに受けの好い仕事にも従つた。思想家としての私は、世間の所謂若い人達から、いつの間にかこれでも思想界の先驅者の一人に數へられて居た。貧乏のどん底に陥つた上に、自分の始めての子に死なれた當時、一旦力強く内部へと引き寄せられた私の心は、いつしか又外へと向つて居た。その始め自分の爲めに、自分一個の爲めに考へ出した事が、いつしか外部の世界に對する空疎な、附焼刃的な議論と變つて居た。そして私の家庭は、いつしか私一個だけは例外として、形造られ

るやうな工合になつた居た。併し金錢上の収入が少しはよかつた爲めに、家庭内では大した波瀾も起らなかつた。私は依然として自分一人だけ例外扱ひされて、子供を邪魔にしたり、父を責めたり、妻を叱り飛ばしたりして生活して居た。

丁度その頃浮足になり、元氣づいて居た私をして、最も得意に自分を世間へ乗り出させるに都合の好いやうな世間的に見てかなり大きな事件が突發した。それは當時文壇で最も尊重されて居た或る一人の名士及びその人の事業を中心として起つた事件である。その事件の如何なるも

のであるかについては、私はいまなほこゝで語る事が出来ないけれども、それが所謂文藝の爲めとか、日本文藝界の爲めとか、新らしい時代の爲めとか云つたやうな大ざつばな考へに熱し易かつたその當時の私達の爲めには、自分達の姿を鮮やかにすべく最も都合の好い事件であつたことだけは明らかに云ひ得る。それと同時に又その事件が、その裏面に於て實に測り知るべからざるほどに紛糾錯雜した人間心理の纏れを包んで居た點に於て稀に見る大事件であつた事も今日明らかに語り得る。けれどもその當時の私達は、そんな裏面に伏在した人間心理の紛糾などには一

向頓着しなかつた。藝術などよりも人間生活そのもの、方が重要であると云ふやうな事を一方に口にしながらも、私達はまるで反對の方向へ狂奔した。

かくの如くしてその結果はどうであつたか。本當にその結果はどうであつたか。

豫期して居たやうな事件の展開が見られ、事が着々として進行して行くにつれて、私には全然豫期して居なかつた人間生活の心理の測り知るべからざる紛糾や葛藤が徐々に見え出した。藝術の爲めとか、時代の爲めとか、多數の爲めとか、世の中の爲めとか云つた風な大ざつばな觀念によ

つて騒ぎ廻つて居た間に、表面に現れた事件の蔭には實に測り知るべからざる複雑な人間心理の纏れが、ますます複雑に而もますます悲劇的に紛糾しつゝあつた。そして所謂藝術の爲めの事業、時世の爲めの活動が發展すればするほど、この裏面の心理的紛糾、人間的悲劇がますますその慘ましさの度を加へつゝあつた。少なからざる個人と個人とが、その悲劇の役目をわかつて、日々夜々に骨を削り肉を裂くやうな苦しみを經驗して居る。現在は暗く、行く先きは更に暗瞻として居る。

血迷つて居た私の眼が、一たび此の紛糾きはりなき慘ま

しい人間心理の纏れに向つて開かれた時、私は殆んど茫然自失した。私はもう何としてよいかわからなかつた。無論あの當時私が一緒に事をした多くの人々のうちには、何の氣なしに過ぎて居る人が少なからずあるであらう。又所謂傍觀者の態度で、之れが客觀的意味を味はひつゝある人も少しはあるであらう。又あの當時とは全く反對な態度を持って平氣で居られる人々もなけれどもなからう。併し、此の私——小心つひに度しがたき此の私は、何としてそれを苦しまずに居られよう。先方の人の問題としてよりも、むしろ自己の問題として、どうしてそれについて考へ苦

しまずに居られよう。

しかし一體どうすればよいのか。どう云ふ事を私はすればよいのか。徒らに藝術の爲めとか世の中の進歩の爲めとか云ふやうな美名の下に、幾つとなく犯して来た此の私の過去の罪惡からどうしたら私は救はれるのか。一體今日私は何をしたらよいのか。

『解らない、何事も解らない』

すぐ目の前に怖ろしい人生の事實を控えながら、自己の内部にこれほどの苦しい苛責を感じながら、私の自分に答へ得る唯一つの答へは次のくである。

『何も解らない、何事も解らない』

それは過去もさうであつたし、現在もさうである。

『私には何一つ解つて居ない、人生の事は眞に何一つ解つて居ない』

而して私の過去に於て犯して来た罪惡——さう云ふよりも、現在に於ける私の此の激しい苦しみの凡ては、次の一事實に起因して居るやうに思はれる。

『何も知らず、何も解らない癖に、解つたやうに思ひ誤つて、いろいろ、な事を云つたり行つたりして来たこと』

さうだ、日々夜々に生起しつゝある無数の現象に對して、眞

に心から何が善、何が正であり、何が悪、何が邪であると云ひ得る唯一つの事も私にはないのだ。

けれどもその解らないのはなほ忍ぶことが出来る。しかし、自分が真に無智であると云ふ事を知らない爲めに、犯す罪は私にはもう忍ぶことは出来ない。

今や私には本當に何とかしなくては居られぬ時が来たのだ。

私が自ら顧みて測り知れぬ苦しみを感ずるのは、たゞに前に述べた某氏を中心とした事件ばかりではない。私が世間に對して云つたり、行つたりして来た事の大部分はそ

れだ。而も今日まで真にその自分の生活を根本から何とかしようとする本當の覺悟が私には出来なかつたのだ。

『無知を無知とする』

ことがその古聖の教へた平凡な事が、その最も根本的な事が私には今日まで出来なかつたのだ。

前に述べたやうな事件をはじめとして、私には自分が過去に於てある囚はれたる觀念の爲めに犯して来た罪惡の幾つがつき／＼に私に思ひ出された。そしてそれらの凡てについて——少なくともそれらのうちのあるものについて、私にはどうかしてその罪を償はなければならぬと

云ふ焦立たしさがあつた。ああもしよう、かうもしようとする、その後の私の心は絶えず苦しみ焦立つた。しかし結局、『何が私に解つて居るか』

一旦此の自己の無知から犯した罪の怖ろしさを感じ初めた私に、どうして再びそれが出来ようか。「人生問題のうちで最も簡単なこと——即ち何が正しいか、何が正しくないか」さへ解らぬ私——それについての根柢からの確信のない私に、何がなし得るか。

かくの如くして、つひに私の心は、これまでとは全く異つた道を歩まなくては、寸時もぢつとして居られなくなつた。

私のなすべき事は、何よりも先づこれまでの自分の生活、自分を最も明白な誤りに導いた過去の自分の生活から、出来るだけ明白に解脱することだ——かう私は思つた。

而して最近一年半ほどの私の努力は、此の自分の過去の最も明白なる過謬からの解脱へと向けられたのである。

六

以上の如き内心の苦しみを感出し出してから、私は神経的にも怖ろしいほど病的になつた。あらゆる事が怖ろしくなつた。不眠の夜が、數多くなつた。破滅にまで只一步の

ところまで、幾度誘ひ出されたか知れない。自殺の想像が殆んど毎夜のやうに私を襲つた。家庭内でのその頃の私は、ああ實に何と云ふ焦立たしい、何と云ふ馬鹿げた男だつたらう。一日のうち一時間とつゞいて家の者と席を共にすることさへ、此の二三年私には出来なかつた。父に對しては流石に口の上だけの毒言で済ましたが、妻や子供等に對しては、私は幾度心にもない亂暴を働いたことだらう。その爲めばかりでもなからうけれども、妻は一種のヒステリーの症狀に苦しむやうになり、その爲めに出産の豫期しない難産に苦しんだのもつひ一昨年夏の事である。わ

けても最も怖ろしい——今思ひ出しても戦慄に襲はれることは、一昨年の春の或夜の出来事である。その夜も私は心内の苦しみから、怖ろしい不眠の惱みに轉々と身を悶いて居た。夜明けに近い頃だと記憶するが、突然子供がおびえたやうに泣き出した。その泣き聲が、私の亂れて亢奮した神経に何とも云へない不快な響きを傳へた。しかも妻は一向それを知らずに眠つて居る。二三度つゞけさまに呼んだが起きない。私はもう何もかも解らなくなつた。そして全然機械的にはね起きた。そしていきなり鏡臺の抽出しの中のある一つのを攫んだ。そして私はそれ

を自分みづからの生命に對して使用しようとした。しかし、その瞬間……私のうしろからそれまでに覚えなかつたほど力強い妻の腕が私を引き止めた。

『何をなさるんです!!』

かう云ふ妻の叫び聲が、突如として私の心呼びさました。ああ、一體私は何をしようとして居たのか。私は一體何をしようとして居たのか。

けれども、さうした私の病的状態は、その後二ヶ月ほどして二番目の子供が死んだ子と同じ種類の難病に罹り、折から妻が難産の床に就いて非常に危険な状態に陥つた時に

至つて、突如として平靜に復歸した。今にも死ぬかも知れないやうな難病に苦しむ妻と子を右と左に控へ、まるで放心したやうになつた老父をいたはりながら、約三週間と云ふもの殆んど一睡もせずに見護し通したあの當時の私の心的状態は、何と云ふ不思議な苦しみと愛とのハルモニイを奏して居たことだらう。而も私のその自分ながら驚かれるばかり不思議な心的状態を裏づけた努力は、家庭内の凡ての者の幸福な結果を以て報ひられた。父も、病兒も、妻も、新たに生れた兒も、そして私も、その難關を切りぬけて、健康な顔を見合はすことの出来る日が來た。私達は、これま

でに一度も経験した事のない、温かい家庭の空気を快く呼吸することが出来た。

私の心内に、未だ嘗て一度も感じたことのない、愛に伴ふ努力の歡びが微かながらに感じられるやうになつたのは、全くその時からである。晴れた日の太陽の光を浴びて、靜かに呼吸することの如何に歡ばしいことであるかをかすかながらに味ひ得るやうになつたのも、全くそれからである。何となれば、久しい年月の間、私は晴れた日と曇つた日とを、心から味ひ別つやうな氣分になる時なしに、生きて来たからである。

此の平和、此の歡びは、私にどうして得られたか……つひ先頃まであのやうな破滅にまで唯一歩のやうな生活をして居た私に、此の待ち設けなかつた運命と共にやつて来た此の平和と、此の歡びとは一體どうして私に得られたか……私の中の如何なるものがそれを持ち來たしたか……けれども私はその最も大切な問題をみづから考へて見る隙もなしに、いつしか又以前のやうに多くの時を外部の爲めに心を勞する私となつて居た。自分みづからよりも、世界や社會を觀る私となつて居た。そしてそれと同時に、善き父として、善き夫として、善き子としての修養を、私は殆ん

ど全く顧みないやうになつて居た。家庭に於ける私は、再び以前の我が儘な、狂暴な主人であつた。父や妻や、何もわからない子供までが、再び沈鬱な朝夕を送るやうになつた。つひには父と妻との間にさへもさまざまの陰が出来、子供は絶えず焦立たしい、尖つた大人の神経の交錯の間に置かれた。惱ましい、狂ほしい不眠の夜が、幾夜も幾夜も私につゞくやうになつた。そして私はつひに卒倒さへするやうになつた。

けれどもさうした苦しい私生活を一方に營みながら、私はそれとは全く反對に他方即ち世間では、働き手としての

自分、いき／＼した言論を書く一個の文學者としての自分を、ますます自ら誇示し、且他の人々からも期待されつゝあつた。世間の人としての私「乃至」文筆業者としての私「は」、日に日に多忙と繁雜との渦中へとより深く引き込まれつゝあつた。自己の本體が刻々に引き裂かれ、踏みにぢられて行くやうな苦しさ焦立たしさを感じながらも、私は内に歸つて眞に根柢からの自己改造を企つることの困難を回避せんが爲に、せめても、よりイデオロギーな外部的生活の方へ心の眼を閉ぢつゝも浮動して行つた。而も日に日に裂しく私は空虚を感じた。日に日にはげしく焦立たしさに苦し

んだ。何を真に教ふべきかを知らないで、而も教師を仕事とする私、何が真に人生の根柢であるかを知らないで、而も人生を論じ、社會を論ずることを仕事とする私——さうした自分を刻々に憎み罵りながらも、私はその憎みと罵りとを云はないで、依然として其の自ら憎むところのもの自ら罵るところのものを、云つたり書いたりすることによつて、虚名と金錢とを得つゝ進んだ。而して此の事に對する自分みづからの心の鞭を、私はより痛く感ずれば感ずるほど、ますます自分みづからは家庭内の暴君となつて自分に近いものを鞭つやうになつた。しかも、絶えず私はさうした

自分の行爲をみづから悔ひたり、恥ぢたり、呪つたりした。

けれども時が來た。どうしても持ち來れない時が來た。私は怪しみ迷ふ家族を無理にも納得させて、斷然東京を去つた。私の一家は突如として越後の郷里に移された。それは昨年四月の事である。

七

北國の淋しい海岸町の、焼跡に建てられた小さな自分の家への移轉は、私達一家族には殆んどそれが何の爲めにな

された事であるか解らぬほどに、突然な事件であつた。けれども此の殆んど豫期しなかつた事件は、私達一家のものに少なからぬ幸福を與へた。「遠からず死ぬかも知れない」と云ふやうな事を時々口にして居た老父は、歸郷後一二週間で見ちがへるほど元氣になつた。戸内にばかり引込んで、めそ／＼泣いてばかり居た男の子は、眞黒になつて日光の中を駆け廻るやうになつた。妊娠中の妻までが、これまでになく快活になり健康になつた。しかし、誰よりも一番著しく變つたのは私であつた。何と云ふことなしに私は、まるで異つた世界へ生れ變つたやうに覺えた。これまで

に覺えなかつた謙遜な、平靜な、健康な、ゆつたりとした氣持が、私の全存在を浸潤したやうに覺えた。

これまではたま／＼歸省することがあつても自分だけが特別な選ばれた人間でゝもあるやうな思ひあがつた氣持で郷黨の誰彼に對して居た私は、始めて何の隔ても置かない心で彼等に接することが出來た。これまでは兎角先方に向つて自分を理解させよう、自分の持つて居るある特別なものゝ値打を理解させよう、と云ふやうな氣持で彼等に對し勝ちであつた私は、今度は反對にこちらから先方を理解しようとする態度に出て彼等と接した。彼等を感化

するよりも、彼等の持つて居る善いものによつてこちらが感化して貰はうと云ふやうな態度で彼等に接した。かくの如くして、私は故郷を出て以後二十年、未だ曾て味ひ知る事の出来なかつた親しみを彼等との間に味ふ事が出来た。本當に心の底から氣の置けないと云つた風な交り——それを私は味ふ事が出来た。

この私の變化は、全く自分ながら驚かれる計りであつた。どうして自分はこんな心持になる事が出来たのだらう——私はむしろその事を考へた。併し、どうしても私自らにはその事の因て來つた明白な理由が解らなかつた。たゞ一

事次の如き事實を、辛うじて擧げ得るに過ぎなかつた。

『何もかも解らなくなり、無茶苦茶に自分と云ふものを投げ出してしまつた、今の自分には嘗て持つて居た一切が失はれたやうなものだ、若し私の内部に何か變化が起つたとすればそれより外にない筈だ』

そしてそれ以上私は追求しなかつた。

かう云つた風な氣持が日一日と重なるにつれ、私は昔ながらの故郷に生活して居る多勢の幼な友達、今は父ともなり夫ともなりして居る昔の幼な友達の間、東京での所謂知識階級の人々の間では到底味ひ知る事の出来なかつた

謙虚な愉快な幸福な私自身を見出すやうになつた。それと同時に私は此の私達の生存して居る大地と自分との微妙な親和をもおぼろげながらに感ずることが出来るやうな氣がした。私の頭の中には永年の間に讀んで來たツルゲーネフやトルストイやドストエフスキなど云ふ人々の書いたものゝ底を流れて居る純真な人間的感情と云つたやうなものが始めて理屈でなく知識でなしに流れ込んで來るやうにも感じた。嘗ては都會的騷擾に掻き亂された自分の心の安易を強ひても求めようとするとところからわけもなしに斥けたツルゲーネフの所謂母なる大地に親

しむ謙虚な幸福な生活の味はひをも始めて心から感得出來るやうな氣がした。

かくて何もかも投げ出してしまつた後に、漠然として私に感じられ出した何とも知れぬゆつたりとした、謙虚な私の心は、その平靜を亂すことなしにつき／＼私自身の過去の生活の如何なるものであつたかを私に顧み考へさせるやうになつた。

『俺は今深い河の底に居るやうなものだ』と又してもラウレッキイは同じ事を思つた、此處では生活は常に靜かだ。常に停滯して居る。此の圈内に入るものは誰でも皆自

分の運命の儘に身を任せねばならぬのだ。何の動搖もない。何の苦悶もない。百姓が鍬で溝を掘つて行くやうに、唯最う自分で自分の道を徐々に開いて行く事が出来るだけだ。而も此の静寂無活動裡に何たる力、何たる健康の存する事ぞ。窓の下には強健な野午莠が厚い草の中から匍ひ出て居り、その上に獨活草がその汁液の多い莖を伸ばして居る。更にそれより高く處女涙草が其の淡紅色の卷蔓を伸ばして居る。見渡す限りの野にはライ麥が絹を伸べたやうに光つて居るし、燕麥は既にもう穂を出して居る。あらゆる木のあらゆる葉、あらゆる

莖のあらゆる草葉が廣がれるだけ廣がり、蔓れるだけ蔓つて居る。一人の女の愛に、又とない青春の幾年を俺は徒らに費してしまつたとラザレツキは更に思ひつゝけた。「何うか此の單調な生活の感化で、俺も眞面目になりたいものだ、そして心を静かにして焦らずに自分の仕事を着々と進めて行くやうになりたいものだ、こんな風に考へた後、彼は再び四邊の静寂に耳を澄ました。が別に何を期待すると云ふのではない——而もそれと同時に絶えず何物かを待ち設けて居る。静寂は前後左右から彼を包んだ。太陽は静かにく／＼穏やかな碧空の中を

移つて行き、雲は穩やかに其の面を漂ひ去る。其の漂ひ動く故を知らず、又その漂ひ行くところも知らず唯もら夢の如く雲は動く』

東京に居て繁雜と喧囂の渦中に自分一個の存在を壓し消されまいとして苦しみ惱んで居た間には強ひても斥けやうとして居た斯うしたツルゲーネフの藝術の興へる氣持が、いつとなしに再び私の全存在を包んで居た。此の氣持は私をして私みづからの過去の生活を顧みさせたと同時に、現在私の親しんで居る郷里の人々の生活の如何なるものであるかをも觀させた。

そこに私は始めて眞に私達所謂都會の知識階級の者等の生活に就て見る事の出來ない平和と親善と健康と幸福とを見た。所謂知識階級の人達に云はせれば、彼等の多數は無自覺な者共であり、謂ふところの衆愚であり、無學者である。併しその所謂無自覺な、無學な生活のうち、何と云ふ力強さがあり、何と云ふ平安があり、何と云ふ情愛があることだらう。無智なるが故に、無自覺なるが故に、彼等は或は時代の奴隸であり、歴史に引きずられて行く衆愚であるかも知れない。併し、それは只形を見て心を見ない者にさうであるに過ぎない。寧ろ實は彼等にこそ如何なる時代

にあつても、如何なる社會状態の下にありても、みづからを亂さず、他を亂さず、而も着々として相互の幸福を求めつゝ、生きて行く事の出来る強い力がある。如何なる壓迫の下にありても、甘んじて生きて行くことの出来る強い力があり、美しい人情がある。かくして歴史始まつて以來何千年の間幾千萬億の人が生きて來た。苦しみの下に樂しみを、得、拘束のうちに自由を味はひ、悲しみの奥に歡びを求め、生きて來た。その強い力は一體何であるか。その美しい愛は一體どこから出て來るのか。

けれども所謂知識ある人々、所謂自覺せる人々、所謂進歩せる人々は、多く之れを見ない、自分達の生活が如何に苦しいものであり、如何に不自然なものであるかを知りつゝ、も、なほ彼等無自覺者流を卑下して居る。甚だしきに至つては、自分達の知識から得た抽象的眞理によつて、徒らに彼等をその眞理の自覺に導かうとまでする。彼等にとりては彼等の生活の破壊となるやうな、なまじいな知識や、ひねくれた反抗心を彼等の胸に植ゑつけることによつて、彼等を向上させてやらうなどゝ、たくらんで居る。何と云ふ事だ。何と云ふ怖ろしい事だ。かくして彼等をしてますます彼等本來の誠實と勤勉と情愛と忍耐と節欲とから、歩一

歩彼等を引き離させやうとして居る。之れがどうして社會の改良だと云へよう。これがどうして社會の革新だと云へよう。パンを欲するものにはパンを興へるが好い。なぜ彼等所謂社會革新者等は、パンを求むるものに石を興へんとするのであるか。

若し彼等をして眞により善き生活に向はしめんとならば、何よりも先づ彼等をして彼等の有する善きものを眞に知らしめなければならぬ。彼等を離れて作られた抽象的な理論によつて、眞に彼等のうちにある善きものによつてますます彼等の生活を幸福なものたらしめなけ

ればならぬ。謂ふところの民衆宗教も、民衆藝術も、此の一點を離れては凡て無意味である。單に無意味であるばかりでなく、むしろ有害である。

けれども、實際はどうであるか。多くの所謂進歩した人々は云ふ。「一般民衆の人情は日に頹廢し、美風年と共に衰へつゝある」と。併しながら、それは彼等一般の民衆が無自覺であり、無智であるが爲めではない。寧ろ反對に謂ふところの進歩の名の下に、開發の名の下に、なまじいなる知識を以て彼等の静かなる生活を攪亂する者等の所爲である。淺薄なる成功熱によつて彼等を攪亂したものは誰である

か。進歩の美名の下に、彼等をして忌はしき黨争の渦中に投ぜしめつゝある者は誰であるか。將又革新の美名の下に、忌はしき現在嫌惡の心と憎むべき反抗心に苦しみ悩ませんとしつゝあるものは誰であるか。私はかう考へ疑はないでは居られなかつた。

歴史有つて幾千年、眞に力強く生きて來たものは彼等ではないか。如何なる時代をも通じて黙々として力強く生きて來たものは彼等ではないか。敢て争はず、敢て逆らはずして、而も幸福なる生活を味ひつゝ生きて來たものは彼等ではないか。その力はどこから來たのだ。私等こそ

彼等に學ぶべきである。彼等をして今日に至らしめた眞の人間の信仰——私達こそ眞にそれを彼等から學ばなければならぬのではないか。如何なる運命の下にもよく堪へ、よく忍んで生きて來た従順な、謙虛な、而も力強い彼等の生活にこそ、眞に私達の學ぶべきものがあるのではないか。

こゝに本當の人間の生活がある。しかるに私達はなぜこれを學ばずして、彼を學ばんとしたのであるか。斯う云ふ反省が、始めて眞實に深く私の心に起つて來た。過去數年の間さま／＼な外部からの知識の誘惑に時々引かさ

れながらも、絶えず私の求めて来た眞の人間主義の根柢、眞の自我生活の根柢はこゝにあるのだと云ふことがおぼろげながら私に會得されて来た。そして、それと同時に私にはかのドストエフスキが如何なる壓迫の下にあつても、如何に虐げられても、なほ且眞の人間愛と人情美を失はない人々の生活に無限の渴仰を捧げて居た心持も、トルストイが『我が懺悔』の中で告白して居る一般人民の信仰生活に對する渴仰の心持も、始めて理論なしに會得出来るやうな氣がした。わけても私の郷里地方に今日なほ深い精神的感化を與へて居る法然上人の教へ、親鸞上人の教への

根柢に流れて居る人間心の流れが、私の心に滾々と流れ込んで来るやうに覺えた。私は少年時代に養はれた浄土一門の宗教的感情が、私の胸の奥の奥に今なほ生きて居るのを認めないでは居られなかつた。

かくして私の内部には、自分ながら驚かれるばかりの變化が起つた。今迄とは全く異つた世界が見え出した。表と裏と云ふほどの變化が起つた。

八

私は始めてこれまで自分の求め悩んで来たものゝ何で

あるかを知つた。而も私のその求め方が全然間違つたものであつたことを知つた。既に他の人の筆で翻譯され出版されて居たことを知りつゝも、私がかのトルストイの『我が懺悔』二卷の翻譯に取りかゝつたのもその心持からである。而して此の事は私のその當時の心の進みを、二重に助けてくれた。私の行く道は日に日に私の前に明らかになつた。

『その當時の私の心的状態は、次のやうな状態に似て居たと思はれる。それは恰も思ひがけなく一隻のボートに乘せられて、自分にも解らない或る岸から、對岸の方向を

示され、權を渡されて一人ぼつちで突き出されたやうなものであつた。私は出来るだけ上手に權を操つて漕いで行く。しかし、中流に近づけば近づくほど流れがますます強くなる爲めに、今にも目ざす航路の外に流れさうで、自分と同様に流れに流される航海者に出遇ふこともますますしげくなるばかりである。其處此處に力を籠めて漕いで居る孤獨な水夫達がゐるかと思ふと、彼處にはまた權を流して困つて居る人々も居り、また多勢の間を乗せた大きなボートや無数の大船がある。ある者は流れと戦つて進み、或るものは流れに従つて進む。流

れを下つて行く長い行列を見つめてゐる私は、進めば進むほど自分に指定された航路を忘れる。流れの丁度真中に行つた時に、ボートや船に取り巻かれて彼等について流された私は、自分の出發した方向をまるで忘れて了ひ、自分の持つて居た權を棄て、しまつた。歡喜に充ちた航海者達は、權や帆で流れを下りながら、四方八方から一聲に、この外に方向などの在りよう筈がないのだと呼び合つてゐる。私はそれを信じて、彼等の行くまゝに行つた。私は遠く流されて來た。私の死なねばならない急湍の唸りが聞えるまでに流されて來た。そして既に

私にはその中で壊されたボートが見えるのである。私が吾に歸つたのはその時である。私は永い以前に明白にこの事を辨へてゐたのであつたが、今や私の眼前には破滅の外は何物もない。私はそれに向つて急いでゐる。それでは私はどうしなければならぬか？しかし後を振り返つた私は、無数のボートの群が流れの力に逆つて絶えず闘つてゐるのを見た。そしてその時に私は岸のこと、權のこと、航海のことを凡て思ひ起して、直ぐに力を籠めて流れを漕ぎ始め、再び岸の方に漕ぎ始めた。』
かうトルストイは彼の心の轉化について語つて居る。更

に彼は

『その岸は神であり、その航路は傳説であり、その權は神との結合を求めて岸に向つて進む爲めに私に與へられた自由意志である。かくして生命力が私の中に更新されて、私は再び生活を始めた』

と云つて居る。此の彼の生活更新は、彼の後半生の事實がよく語つて居ることは、私もさまざまの記録を通じて知つて居るのである。

けれども私自身の生活轉化は、まだくそこへは行つて居ない。私はまだやつと自分の眞に求めて居た道の方

が解つたゞけである。所謂平凡人の生活、所謂衆愚のうち、に、本當に私自らの求めて來たものゝ存することを知つて、その方へ自分を還元して行くことが自分をより善くして呉れるにちがひないと感じたゞけで、まだくそこへ所謂衆愚の幸福な生活の根柢を成して居るもの何であるかは、充分に攫んで居ない。永い年月の間、彼等の中心精神に力を添へて來たものゝ何であるかは、充分に私に攫まれて居ない。しかし、私は何よりも先づ彼等の生活の善きものの根柢を知らなければならぬ。それによつて自分を感化されなければならぬ。けれどもそれはこれまで自分達

のやつて来た研究とか、発見とか云ふ行き方でなさるべきものでなくして、自ら平凡人そのものと成ることによつてなされなければならぬ。本當に自分を知ることが、推測や解剖によつて客觀的知識を得ることではなくして、自己に最も平凡なものそのものと成ることではなければならぬ。自己を離れて新らしきものや眞實なものを探し求めるのでなくして、自分みづから眞の自分みづからに歸ることではなければならぬ。

こんな風に考へた私にとりて、過去の私自身の生きて來方は如何様に見え出したか。私はそこに自分の眞に欲す

るものから、ますます遠ざかりつゝ、而も自らは自己の最も深き要求によつて動きつゝあるが如く思ひなし、かくして歩一歩破滅の淵に近くあへぎつゝある慘めな一個の男を見出さずには居られなかつた。少なくとも自分は自分の妻や子や父や隣人と共に豊かな愛と平和の生活を營む事を欲して居る。而も何か知ら他のものゝ爲めに、日に日にその欲望から遠ざかりつゝある。過つた方向だと感知しながらも、なほ一たび失ひかけた家庭の幸福を再び根柢から取り戻すことの苦しい忍従を回避せんが爲めに、却てこれを取らずしてかれを取りつゝ進んで居る。最も平凡な

る欲望を、その平凡なるが故に価値なきものとして、その爲めの苦しい努力からのがれようとし、その爲めに却て自分以外の境遇を悪いものとして居る。此の最も憎むべき私自身の生活過誤は一體どこから來たのであるか。どうして私はこんな風になつたのであるか。

その反省は、端なくも私に世間によくある骨董好きから破産した人々の誰彼を思ひ出させた。一寸おぼえ出した自分の骨董趣味から、眞に何が良きかを知らず又知らずともしないで、無暗とさまざまの骨董を買つたり賣つたりする。本當の美的價值や實用的價值などを、そつちのけに

して、たゞ／＼自分にとりて珍奇なるものを買ひ集める。而も時を絶るに隨て、さまざまの事から金錢欲までがそれに加はつて來る。一つ掘出し物をして大にもうけてやらうと云ふやうな野望さへ加はつて來る。けれども根本に於て既に眞に何が良きかを鑑別する爲めの修養を缺いて居る彼は、自己の骨董いぢりの經驗から得たいくらかの趣味性にまでも統一を與へることを知らない。隨つて金をもうけると云ふ事にすら確實には成功しない。而も失敗すればするほどますます／＼彼は執着を増す。かくしてつひに破産のどん底にまで墮ちて行く。取り残された何等の

美的價値も實用的價値もないがらくた物の堆積の中にもれて、徒らに身の不幸を嘆ずるに至るのが彼の最後である。而も彼の行爲によつて何人をも益しなかつた彼は、つひに又何人からも益されない彼である。加之彼の後には彼によつて同じ方向へ誘惑されて零落しつゝある幾人かの哀れな人を残すのである。

私は自ら顧みて、自分の過去もそれによく似たものである事を知つた。單なる外的誘惑から眞に欲しもしない知識を無暗と取り込むことによつて、私は一體何を得たか。又それを賣つて食ひ、それを人に向つて吹聴することによ

つて私は一體何を得て來たか。而も自ら求めて陥つた自分の精神的窮境に對する自己の憤懣を、却て外部に向つて復讐せんと企てゝ居る者さへ、世間には少なからずあるのだ。それを私は今何と見たらよいか。

私は更に「仕事」に囚へられて、漸時自己の人間性を破壊しつゝあつた自分を見た。仕事——わけでも私達の従事して居る所謂我みづから何ものかを創造(?)せんとする仕事は、兎角仕事の爲めに自己を失ひ勝ちになる。その仕事は自分の生活の最も貴い營みであると云ふ風な考へを形造

り勝ちである。それには虚名慾が他の如何なる種類の仕事に於てよりも多く伴ふ。競争心も伴ふ。金銭慾も伴ふ。それらもろくの要素が集つて、一層自分の仕事に對する執着を烈しくする。而してその執着は、漸時に人間としての他のもろくの活動を邪魔物扱ひにさせる。その結果自分の仕事以外の他の凡ての事が價值のないものゝやうになる。凡てのものを嫌ひ勝ちになる。

けれども如何にさうなつても、彼が一個の人間である以上、彼には常にさまざまの人間の欲求が激しく内部から裏切つて出て来る。その爲めに彼はいよいよ彼の苦しさ焦立

たしさを重ねる。此の普通人としての欲望と藝術家(恐らく藝術家のみではなからう)としての欲望との均衡の日に、日に確實に失はれて行くことになつて、彼は歩一步人間としての破滅の淵に近づいて行くのである。

『天才とは一種の恐るべき疾病である。天才の作家は自分が種々の情緒を産み出すと同時に此等を皆喰ひ盡す悪魔を胸に畜つて居る。疾病が人間を滅ぼすか、人間が疾病に打ち勝つか、何れが勝利者の位置を占むるであらう。自分の持つて居る天才と性格との間に、完全な平均を取り得る者は大偉人でなければならぬ。詩人その人

にして一大巨人であるにあらざれば、ヘルキユリーズのやうな肩を持つて居るにあらざれば、彼は當然その恒心を失ふか否らざれば、その天才を失ふに至るに違ない。」とメレヂコウスキーはその著『フロオベル論』の中で云つて居る。けれどもその事は天才について云ふよりも、寧ろ私達のやうな天才のないもの、眞に根柢からの確信を人生に對して持たない者が、徒らに天才の仕事を自分の仕事としようとしてあせり苦しむ場合に、一層よく適切である。

此のなまじひな天才氣取りと仕事熱とが、どれだけ私を人間と云ふものから遠いものとしたことであらう。ろくな

事も出来ない癖に何か知ら爲ようとするところから、一層焦立たしさが烈しくなり、人間性の滅却もそれによつて一層烈しくなつた。自分の家族に對しても、亦世間の人々に對しても、私は日に日に愛の心を失ふばかりであつた。仕事——何かしなければならぬとあせる私の心は、絶えず私を見えない力で追ひ立てた。静かなゆつたりとした心持で、人と接すると云ふやうなことは、私にはまるでなくなつた。酒でも飲み、女とでもふざけながら、友人と遊ぶ事は出来た。しかし、しつとりした人間らしい心持で、他人と接したり、他人の爲めを思つたりするやうな事がだん／＼出来

なくなつた。かうして私は仕事を中心にした焦立たしい交際、官能的享樂でその場を胡魔化し合つた不安な空虚な社交以外、眞に人間的接觸を味ふことの日に日に少なくなつて行く多くの人達の中に、時を追つて孤獨と空虚と焦立たしさを増して行く惨めな自分を見出したのである。

そればかりではない。更に私達のところへ或は書いた物を持ち、或は特殊な話柄を持つて訪ねて来る若い人や、手紙を寄越す若い人の數はかなり多いのである。無論そのうちには眞に自己の人間としての生活上の痛切な疑問を抱いて居る人又は眞に自己の内部生活を表現しようとする

苦しんである人も少なくないのであらうけれども、その多くはたゞ漠然たる誘惑から文學を好んだり、文學と云ふ仕事を自分の仕事としようとしたり、又は文學者とか思想家とか藝術家とか云ふ所謂「選ばれた少數者」としての自分を將來に見出さうとしつゝある人々である。そしてそれと同時にさうした自己の心の向き方の爲めに、知らず／＼自己の人間的方面を徐々に滅却しつゝあるやうな人々である。かう云つた種類の多くの若い人々との接觸に於て、私は如何に永く自分の「人氣」をつながうとして來たか。「そんな間違つた道を踏まない方が好い」——此の一語を明確に

云ひ得ない爲めに、私は如何に永く自らを欺き他を欺いて来たことぞ。一つは自分の虚榮心の満足の爲めに、一つはさう云ふ風な人の多くなることが時代の進歩だと思ふやうな迷信から、一つは大膽に斥け得ない弱い心から、一つはそれを明確に云ひ切る爲めには自分みづからその瞬間から全く別な人間とならなければならぬところから、一つは雑誌編輯者として又文筆業者としての目先の利益からその他さう云つた風なさまざまの理由から、私は如何に多くの人を欺いて来たことだらう。

ところが何と云ふ怖ろしい事だ。私がつひにたまらな

くなつて青年のさうした風潮を否定して、各人眞に善良なる一個の平凡人たるべしと云ふやうな事を或る雑誌で書いた時に、次の如き事を云つてよこした人があつた。

『私はあなたが平凡人になれと云はれたことよりも、平凡人になれと云ふやうな事を書いて居るあなたのやうな文學者になりたいのです』

何と云ふ怖ろしい事だらう。これは丁度私達が嘗て「なあに、俺達は金と虚名がほしいから書くだけさ」と公言しながら何か知ら書いて居る所謂大家の、藝術家としての地位を羨んだと同じ事である。

「かうして同じ事が繰り返されて行くのだ」
かう思つた時に、私は過去の私に對して堪へがたい憤怒と羞恥とを感じた。

「徒らに萬人の爲めとか、時代の爲めとか云ふ美名の下に、根柢の確信を何一つ持つて居ない此の俺を誰か來つて葬らうとする人はないのか。自分の仕事の爲めに自分の家族を苦ませるのはまだしもゆるされる事が出来るかも知れないが、その爲めに世間の人の子を躓かせる事は斷じてゆるされない。誰か來つて此の俺を葬らうとしないのか」

憤激のあまりかうまで思ひつめた私は、始めてこれまでに私を鞭打つてくれた少數の人々の言葉を、謙虚な心を以て受け入れる事が出来た。これまでは私は私を罵つたり嘲つたりした少數の敵に對して、何よりも先づそれを口にしたり筆にしたりする彼等の動機を考へて、自ら安んじて來た。併し今はもうさうばかりは思へない。よし彼等がどんな心持で、又どんな目的でそれを云つたとしても、もしその言葉のうちに自分にとりて眞實なものがあるならば、歡んで受け入れなければならぬと云ふやうな氣持になつた。

茲に至つて私の眞になすべきことは何であるか。唯一つしかない。

『それは過れる道を踏んで来た過去の我みづからを葬ることだ、眞實の自己を生かす爲めに……』
これが何よりも他を犯さず、且自らを眞に生かす道であると私は思ふやうになつた。

『もし右の眼なんぢを罪に陥さば扶出して之を棄よ蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり』
私の今なすべき事は此の外にないと私は思つた。これまではどうしても離れる事の出来ないものゝやうに思つて

居たさまぐのものが、今始めて投げ捨てゝも差問へないもの、むしろ投げ棄てなければならぬものであるやうに思はれて来た。

濶然たる天地が、突如として私の前に開かれた。

九

抉り出したり、斬り捨てたりしななければならぬさまぐなもの、私の眼にハッキリと見え出した。わけても私を今日までの過つた生活に誘惑して来たのには、偉大の觀念が與つて力あるやうに思はれた。私達の生活にとりて最

も大切なものは、何が正しいか何が正しくないか、何が善いか何が悪いかの根柢からの判断でなければならぬにも拘らず、私達は、その根柢の判断をなす程に自分が完成されてゐない場合には、兎角此の「偉大」の觀念を持ち出し勝ちである。そして善惡を離れて、強ひてもその所謂「偉大」に酔はうとする傾きがある。「偉大なる人物」「偉大なる行爲」……此等の觀念は、多くの人によつてそれが適當なる意味を與へられて採用されないで、何ものかの回避の爲めに採用される。トルストイによつて導かれた此の反省は、私には此の上なく痛切なものであつた。

何か知ら偉大なことを爲ようと云ふやうな心持、何かしら特別なことをして居ると云つた風な心持の爲めに、私はどれだけ多くの過ちを重ねて來たことだらう。トルストイも云つたやうに、生活の眞の根柢は如何なることが善であり、如何なることが惡であるか、如何なることが正であり、如何なることが不正であるかの確乎たる判断でなければならぬにも拘らず、又おぼろげながらもその事に氣づいて居るにも拘らず、いつしか自己の空虚と不安とを糊塗せんが爲めに、かの所謂「偉大」と云ふが如き漠然たる觀念によつて自らを欺きつゝ生きて行く。眞に善くすべき者は我み

づからであり、乃至は自己に最も近き我が妻であり我が子であるにも拘らず、それをなすことの最も困難なる努力を回避せんが爲めに、人は往々縁遠い世間の事を憂ひたり天下の爲めを憂ひたりする。退いて自ら脩むる事の困難か、らのがれんが爲めに、人は兎角進んで他に説かうとするが如き過りたる生活に赴かうとする。かの徒らに聲を大にして世を憂ひたり、人生の革新を叫んだりする人々の間に、彼自身眞に一個の人間としての價値の甚だ少なき人々を見出すことの少なからぬは、私達の能く知るところである。

「俺は自分一個の事が構ひ切れなくなつたから、天下の事

を論ずるのだ」

と云ふやうな事を平氣で口にしつゝ生きて居る人さへある。かうして人々は相互に他にのみ、外にのみ徒らなる求めを向けつゝ、いつしか自分みづからの人間的價値や根本的要求を失ひつゝある。かく云ふ私自身も實にその最も過れる者の一人であつた。

更に私達を誘惑して以上の如き過つた生活に陥れるものに誤りたる「進歩」の觀念のある事を私は知つた。此の事はトルストイその人も『懺悔録』の中で痛切に語つて居るところである。

『ヨーロッパに於ける私の生活と、多くの著名な學識ある外國人達との交際は、一般的完成の信條に對する私の信仰を強めた。それは彼等の間にこれと同じ説が流行して居るのを見たからである。この信仰は當時の最も教養ある人々の間に共通した形を成してゐるものであつた。それは「進歩」と云ふ一語に盡すことの出来るところのものであつた。その頃の私にはこの言葉に眞實な意味があるやうに思はれて居た。他人もやつてゐるやうに、どうして自分の生活をより善くしたら可いかと云ふ問題に苦しめられて、自分は進歩する爲めに生活せねば

ならないと答へるのは、恰も波と風とによつて流されるボートに乗つてゐる人が、何處に向つて漕いだら可いのだと云ふ大切な疑問に向つて、吾々は何處かへ流されてゐるのだといふ答へを徒らに繰り返してゐるのと同様だといふことを私は理解しなかつたのである』

一體「進歩」とは何であるか。自己にとりて又人間にとりて眞の「進歩」とは如何なることであるか。その根柢の判斷が自分の心に確乎と出來てゐないのに、人々は殊に私達藝術家仲間は何となく自分達のしてゐることが世界の進歩に貢献してゐるやうに思ひ易い。單にそれだけならまだ

好いが、さう云つた風な自分達の仕事の爲めに、眞に自分の欲してゐる人間的幸福がいつとなしに傷けられ損なはれつゝあるのに氣づかないで、何か知ら自分は人間として價値ある事を行つて居るやうに思はう／＼とし勝ちである。私も亦その最も過れる者の一人であつたのだ。

しかし就中私達をして過りたる生活に導き勝ちなものは、近代乃至現代生活に最も勢力を占めて居ると稱せられる所謂客觀的知識又は唯物論的見解である。事物の客觀的研究が私達の生活に附與してくれる幸福は、私達も充分有がたく思つてゐる。けれども好加減な客觀的知識物質的

見解が私達を誘惑して、却て人間的幸福の破壊に陥れつゝある事實の如何に多いかは、何人も之れを否定することの出来ないところである。眞に一個の人間的要求を離れて、徒らに客觀的知識から引き出した結論が、如何に多くの人を謂ふところの近代的不幸のうち投ぜしめつゝあることぞ。外を見て内を見ず、他を見て自己を見ず、形を見て心を見ない爲めの所謂知識的生活が、如何に多くの人々を過りたる生活の方へ導きつゝあることぞ。かの徒らに物質萬能主義を以て人間生活を律せんとするもの、かの徒らに外的革新を以て人間生活を救はんと企つるもの、そのいづ

れか此の類ひでないものがあらう。かくの如くして眞の人間性を外にしての不安動搖せる心狀のうちには、多くの靈魂ある人の子を陥れ苦しませんとしつゝあるのは、現代の所謂進歩せる人々の多くが陥りやすき惡弊ではないか。私はかの冷やかなる物質萬能主義者を嫌ふと同時にかの徒らなる外的破壊論者をも憎まざには居られない。私達の人間的生活を墮落せしむる者は彼等だからである。而も翻つて顧みる時、現代に生活する私達の最も陥り易い理想の存するところも、亦そこである事を思はずには居られないのである。

かう云ふ事をつぎ／＼に反省して來て、最後に私は眞に私みづからの爲すべきことの何であるかを考へた。そしてそこに始めて私は私自身の一個の人間としての最も眞實な要求を内省すること、而して飽くまでもその自覺を根柢とした生活の途上に於て、眞に我みづからの爲すべき事の何であるかを知ること、知つて自から行ふことが、自己にとりて唯一最上の事であることを感知した。

私の心の眼に私自身の本當の姿の見え出したのはその時からである。私自らの心の眼に私の父と私の妻と私の子供と私の眞に愛する友人との見え出したのもその時か

らである。そしてそれと同時に過去の自分がルソーの所謂「我みづからの隣人を愛するの義務を免れんが爲めに、鞭人を愛する」の徒に近いものであつたことを痛切に感じないでは居られなかつた。更に又それと同時に現代の社會を以つて矛盾と不公平と不幸とのみに充ちたものであるやうにのみ思ひ勝ちであつた私の考への甚だしく囚はれ欺かれた考であつた事を知り、黙々として生活して居る所謂凡俗生活のうち、今なほ依然として調和あり健康ある廣大な世界を保つて居るものゝある事を知つた。

かくして私の何ものかを求むる眼は、自分達のやうに人生の幸福を攫みぞこなつた者等の生活から去つて、今なほ力強く人間的調和を得て居る健全なる凡夫の生活へと轉ずるやうになつた。

それは例へば大海に棲んで居る魚のうちの或るものが、何かひよつととした機會に途を過つて岩の根に鼻をぶつけて、その岩を破らなければもとの大海へ還れないやうに感じ出し、無暗と鼻を岩根に打ちつけて居たが、その痛さに堪へられなくなつてくると向き直つて見ると、そこには自分が失つたと思つて居た自由な大海のあること、その中に自分が依然として生きて居たのだと云ふことを知つた。

——丁度そのやうな轉化であつた。

「岩に鼻をぶつけて死ぬ魚もある。それによつて生そのものゝ凡てを失ふ魚もある。」

けれどもこの魚は歡喜に充ちてもとあつたよりは二重の歡喜に充ちて、元の大海へと還つて行く。海は依然として舊のまゝの海である。而もその魚には全く新らしい歡喜に充ちた海である。そこで彼は岩根との愚かな争ひから得た傷を癒やし、曾て知らなかつた歡喜の生を送らうとするのである。

その魚は私であり、その大海は曾て私が住んで居た新人

達の所謂衆愚の生活である。謂ふ所の凡夫の世界である。謂ふ所の單調無味の生活である。謂ふ所の歴史に引きずられて生きて行くものの生活である。謂ふ所の因習と傳統の蔭に安らかに働く凡人の生活である。私は今そこへ還つて行くのである。

十

上來告白し來つた如き徑路を辿りつゝ、人間生活の意義、自我生活の根柢を攪みどこなつた一個の哀れむべき思想界の乞食がその蹠踉たる歩みを塵多き街路の上に運びつ

ある時、彼の耳には實にさまざまな囁きが聞えて來た。一つの聲は云ふ。『お前はまだ經驗が足りない、もつと經驗をしろ』と。

他の一つの聲は云ふ。『お前にはまだ執着が足りない、もつと執着を燃やせ』と。

更に他の一つの聲は云ふ。『お前にはまだ現實に關する客觀的知識が足りない、もつと現實を觀察して客觀的知識を造れ』と。

更に又他の一つの聲は云ふ。『お前は自分の生活の安心内をに求めようとしてもそれは無駄だ、それよりも外へ進

め、無茶苦茶でも好いから外へ進め、戦へ、そのお前の戦ひによつてお前は救はれるのだ』と。

けれども既にみづからの外部への當てなき道を辿ることの不安に堪へられなくなつた私にとりて、何よりも第一に自分の求めつゝあるものが最も内的なる精神的安立であることを自覺した此の私にとりて、それら多くの所謂智者達の囁きが何の權威があらうぞ。私の今眞に求むるところのものは、根本からの心の統一であり、善良なる人間的な生活である。さまざまの動機によつて氣ちがひ染みたる眼付をして彼方へ／＼と騒ぎ廻つて居る人達の世界でな

くして、むしろ恒の心をしつかりと攫んで平凡ではあるが、併し力強い生活の歩をゆつたりと歩みつゝある人々の情愛の豊かな世界である。いふところの凡人の浄土である。永遠を通じて靈魂の求むるところのものをしつかりと攫んで放さない人々の世界である。いかなる境遇の下にも人情を味ふことを忘れない人々の世界である。

幾百千となき似而非智者達のさまざまな進歩した思想が説かれたり呼ばれたりしつゝある世の中に、何とかして我こそ先に新らしい生活の根柢を攫んでやらうと、幾何となき所謂新人達が苦しみもがきあせりつゝある現代に於

て、

「お天道さまに濟まない！」

と云つた風な馬鹿々々しいほど単純な信仰の下に、永い一生を黙々として働きつゝけて死んで行くやうな善良な勤勉な幸福な人も決して少くはないのだ。之れをしも無自覺であり、無智であるとして笑ひ去ることが、どうして出来るか。何人にそれだけの權威があらうか。

徒らに自由ならんとし、徒らに知識の導きによつて生活の新化を企てようとして、日々に本來の精神的統一を失ひつゝある現代人の眞に求むるところは一體何であるか。

徒らに人間の幸福なるべき外的状態のみの空想的企畫に驅られて、眞に求むるものゝ何であるかを忘れつゝある現代的傾向の行く先はいづこであるか。而も私達はますます烈しく形にのみ囚はれて、心を省みる邊を持たない。心の苦しみが烈しくなればなるほど、それから脱れ／＼てますます／＼外部へ／＼と狂奔する。外部的に生活の改造を企つる人々は日に其の數を増すけれども、根本的に精神の統一を必要とする熱意ある言葉を聽くこと極めて稀である分裂の苦しみ、隔離の不安は、かくして刻々に私達の心を暗くしつゝあるのである。

たゞ／＼此の根本事實に思ひ至つた如き口吻を以て、わが民族本來の精神的統一を説く人もあるけれども、その多くは矢張り外部的知識の煩ひするところとなつて、なまじひなる知識的満足に終らんとする傾きがある。然らざるものは、單なる形式觀に墮し、形式的、外壓的なる劃一を之れ事として居る。けれどもかくの如き行き方で、どうして眞の根本的統一が得られようか。結果は却て反對の方向へ亂れたる人心を誘ひ行くのみである。

眞の精神的統一は、内部的に與へられる不可抗的な力でなければならぬ。外的智識の結論として得られるもので